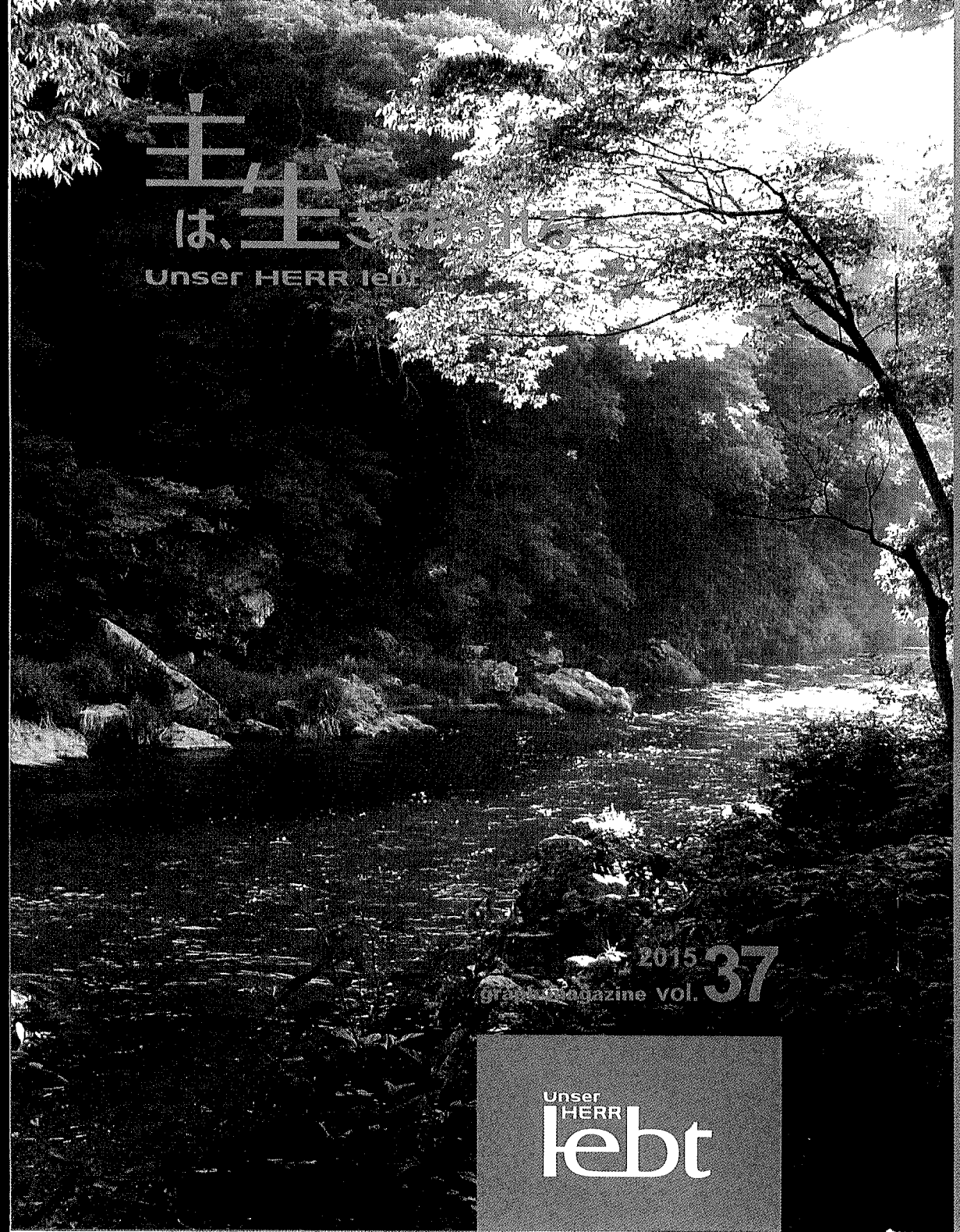

主は、生きておられる
Unser HERR lebt
2015
graphic magazine vol. 37
Unser HERR lebt

Unser HERR lebt

主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol. 37 定価100円（税込み）

Unser HERR lebt

主は生きておられる

メッセージ

4 主なる神の愛の意味と価値　ゴットホルド・ベック

10人の証し

18 ナザレのあんちゃん　山田ゆかり

25 主に信頼する者は、失望させられることがない　佐々木史子

32 あとでわかるようになります　古田雅一

40 真理はあなたがたを自由にします　古田繭子

48 愛も憐れみも自己犠牲もイエス様の約束ですから感謝です　古田知士

55 主は私の羊飼い　古田美知

63 主を仰ぎ生きる者へと変えてくださったイエス様　岩田勇

71 主のあわれみは尽きない　岩田嘉子

79 石の心を取り去られて　佐藤亮

88 主に信頼する者は、失望させられることがない　佐藤多津子

主なる神の愛の意味と価値

ゴットホルド・ベック

主なる神の愛を体験し、「わたしは愛されている！」と心から喜べる人は本当に幸いです。今回のテーマは、まことの神様の愛の意味と価値についてです。

あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、―あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。

（エペソ　2・4～5）

私たちが生きていく上でもっとも大切なことは、真実の神の愛を体験的に知ることではないでしょうか。信仰者は絶えず激しい非難攻撃に直面します。困難な問題に打ち勝つことができるのは、ただ主なる神様の愛によってだけです。ですから、どれほど深く愛されているかをいつも思い起こすべきです。これこそが、「ピレモンへの手紙」の言わんとしている主な内容です。

この手紙は、牢獄に囚われの身となっていたパウロが、古くからの親しい友だちであるピレモンに書き送った愛に満ちた書簡です。これを読む人は誰でも心が熱くなるのを覚えるでしょう。

聖書の中の手紙はどれも、慰めと励まし、また喜びを伝えるために書かれたものですが、パウロが牢獄で書いたこの手紙は特別に重要な価値もっています。

聖霊は、まことに小さなこの手紙をお守りくださいました。ですからこの短い手紙は私たちすべてにとって、極めて価値のある内容をもっていることは間違いありません。

ある意味で、この手紙は主なる神の愛のまことの意味と価値を指し示す、例話のようなものだと言えます。この手紙は、全部で25節からなっており「キリスト・イエスの囚人であるパウロ、および兄弟テモテから、私たちの愛する同労者ピレモンへ。」（ピレモン　1）で始まり、「主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともにありますように。」（ピレモン　25）でとじられています。

きわめて個人的な親しい愛の書で、非常に大切な事がらを示しています。

主なる神の愛の意味と価値

この手紙を通して、主なる神の愛を五つの事がらに分けて考えてみたいと思います。第一に「愛は痛みを共に分かち合う」、第二に「愛は債務を支払う」、第三に「愛は喜んで受け入れる」、第四に「愛は新しい人生の原動力となる」、第五に「愛はまことの希望を与えてくれる」です。

1 痛みを共に分かち合う

それではまず「愛は痛みを共に分かち合う」ものであることを考えてみましょう。そもそもパウロが親しい友であるピレモンに手紙を書くことになったのは、オネシモという人物がきっかけでした。このオネシモはパウロに会う前はピレモンの奴隷でしたが、自由の身になることを願って逃亡し、大都市ローマに潜り込んで姿を隠していました。どのような経緯があったかは分かりませんが、オネシモはパウロと知

り合い、パウロから福音を聞いて罪を悔い改め、主イエス様を信じ受け入れたのです。その後パウロはピレモンのところにオネシモを送り返すことにするのですが、その際、一通の手紙をピレモン宛てに書き、オネシモに持たせました。その手紙のなかでパウロはオネシモのことを「彼は私の心そのものです。」（ピレモン　12）と表現しています。

年老いて、今はまたキリスト・イエスの囚人となっている私パウロが、獄中で生んだわが子オネシモのことを、あなたにお願いしたいのです。彼は、前にはあなたにとって役に立たない者でしたが、今は、あなたにとっても私にとっても、役に立つ者となっています。そのオネシモを、あなたのもとに送り返します。彼は私の心そのものです。

（ピレモン　9～12）

パウロによって、数えきれないほど大勢の人が信仰に導かれたことは疑う余地がありません。またそれらすべての人を、パウロが心から愛したことも明らかです。

けれど、このオネシモには特に「彼はわたしの心そのものです」という強い愛を表しています。なぜパウロにとってオネシモはそれほど大切だったのでしょうか。それは、オネシモが悔い改めに至った事情と深く結びついています。

手紙には「獄中で生んだわが子オネシモのことを、あなたにお願いしたいのです。」（ピレモン　10）と書かれています。

多くの人々はパウロのメッセージや証しを聞いて、あるいは旅先などで生まれ変わりましたが、オネシモはパウロが「鎖につながれているとき」に新しく生まれ変わりました。オネシモの救いはパウロの獄中での試練と直接につながった「実」でした。パウロの苦しみがオネシモの救いと永遠の幸せという結果を生んだのです。

痛みを共に分かち合う時、愛は最も強いものとなります。創世記35章に一つの例をみることができます。紀元前何世紀という時代にベツレヘムの近くで一人の男の子が生まれました。しかしその出産は、まさに悲劇としか言いようがないほど悲惨なものでした。母親はひどい陣痛に苦しみあえぎながらその子を産んだ後、いのちを失いました。

そして彼女は自分の死の床で生まれた男の子の名を「ベン・オニ」、すなわち「わたしの苦しみの子」と呼んだのです。ところが父親のヤコブは絶望的な状態におかれながらも、我が子の名前を「ベニヤミン」、すなわち「右手の子」と名づけました。それは、右手が大切なものであるように、新しく生まれた男の子もまたかけがえのないほど大切なものとして、父親がいつくしんだからです。

同様のことがキリスト者の誕生のために起こりました。イエス・キリストは十字架につけられて、大変な苦しみを経験され、その苦しみの結果として私たちが生まれました。

私たちが救われたのは自分の努力の結果ではなく、主イエス様の御苦しみの結果に他なりません。主イエス様にとって、私たちは「苦しみの子」でありながら、またそうであるからこそ、大いに愛してくださるのです。聖書に次のようなことばが記されています。

（あなたは）あなたの罪で、わたしに苦労をさせ、あなたの不義で、わたしを煩わせただけだ。わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。

（イザヤ　43・24～25）

主なる神の愛の意味と価値

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、・・・しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし・・・てくださいました。

（エペソ　2・1、4～6）

私たち自身は価値のない者でしょう。しかし、私たちは非常に大きな代価を支払って買い取られたのです。

オネシモもまたそうでした。彼は回心の後、ローマからコロサイへ戻ることになった旅の途中でしばしば元気を失い、迷ったことでしょう。けれども、携えている手紙の内容を思うことによって、再び勇気と力とを奮い起こされたはずです。自分を送り出してくれたパウロが単なる同情ではなく、神の深い愛によって愛してくれているということを思い出すとき、オネシモは新しい力と勇気を与えられたことでしょう。

私たちも人生の旅の途中でいろいろなことを経験します。しかし、私たちはただ一通ではなく、たくさんの手紙を、すなわち聖書全体をもっています。聖書は私たちが主なる神によって愛されている、主イエス様を通して愛されている、ということを保証してくれています。ちょうどパウロがオネシモのことを「彼は私の心そのものです」と言ったように、「私たちは主なる神の心そのものだ」ということを確信しようではありませんか。

救われた一人ひとりが神の心そのものである、ということは動かすことのできない事実です。これこそまことの礼拝の根拠です。主の愛は「痛みを共に分かち合う愛」です。

2 債務を支払う

次に忘れてはならない事実は、主なる神の愛は債務を支払う、ということです。

オネシモにとって大きな問題の一つは、ピレモンへの負債をどうやって支払うかということでした。「もし彼があなたに対して損害をかけたか、負債を負っているのでしたら・・・」（ピレモン　18）とあることから、一般に考えられてきたのはオネシモがピレモンの財産を盗んで逃亡生活をする中で、パウロに出会ったということです。

その当時、奴隷が主人から逃げて捕まると死刑に処せられました。ましてや主人のものを盗み、逃げた場合にはどんなことになるか、想像がつくでしょう。ローマまで逃げたのは、オネシモが相当な債務を負ったからに違いないと思われます。

パウロはこのオネシモの最大の問題をどう取り扱ったでしょうか。まことの愛は負債に対し不注意であったり、いい加減であったりすることはできません。パウロは親しい友人であるピレモンに、オネシモのしたことを忘れるようにとは勧めませんでした。パウロは、オネシモの負債を無視したり、減額したりさせるのではなく、自分自身が完全に責任を取ろうとしたのです。「その請求は私にしてください。この手紙は私の自筆です。私がそれを支払います。」（ピレモン　18～19）とパウロは書きました。

パウロはピレモンに対して、親しい友人だからといってこのことを曖昧（あいまい）にはせず、はっきりとした態度をとったのです。オネシモの負債が払いきれないほどのものであったことは確かです。そのオネシモが「請求は私にしてください」というパウロのことばを手紙の中で見たとき、彼の心はどれほど安堵（あんど）し慰められたことでしょうか。

オネシモの負債が死に値するほどのものであると

主なる神の愛の意味と価値

したら、神に対する罪人の債務はどれほど大きなものか分かりません。私たちはどれだけ主を悲しませていることでしょうか。パウロの手紙には「もし」ということばが使われましたが、私たちの場合には「もし」ということばはありません。なぜなら、私たちはみな例外なく、神に対して罪という大きな負債をもっているからです。そして、その「負債」は、私たちの力では到底払うことのできないほど、大きなものなのです。

「その請求はわたしにしてください」というまごころからのパウロの素晴らしい愛のことばに耳を傾けてみましょう。これこそ、福音の神髄です。主イエス・キリストは私たちの罪の負債を完全に支払ってくださいました。主イエス様は刺し通されるために、ご自身の身体を渡されました。「その請求はわたしにしてください」と。

万一、オネシモがピレモンのもとに帰ることを恥じ、自分で懸命に努力して負債を支払おうとしたなら、それは悲劇に終わったでしょう。その負債は彼にとって、まったく支払不可能な額だったからです。もし自分の力で返そうとしたなら、彼は決して戻れなかったことでしょう。同じように、私たちもまた自分の力で主なる神に対する負債を償おうとしたなら、絶対に主なる神の御許（みもと）に帰ることはできなかったでしょう。

すでに救われた方も、まだ救われていない方も、十字架につけられた主イエス様を見上げることによってのみ、本当の慰めを与えられます。「その請求はわたしにしてください」という救い主の愛のことばを新たに聞き直しましょう。

（キリストは）自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。（1ペテロ 2・24）

主イエス・キリストが十字架の上で私たちの罪を負い、その身を犠牲にされたことによって、私たちの罪が完全に贖われたこと、赦されたこと、負債が支払われたことを知り、その確信をもつことができますように。

3 喜んで受け入れる

第三に、まことの愛、すなわち神の愛は喜んで受け入れる愛です。

パウロはピレモンに、オネシモを自分と同じように受け入れてほしい、「もしあなたが私を親しい友と思うなら、私を迎えるように彼を迎えてやってください。」（ピレモン 17）と書き送りました。これほど真実に満ちた愛のことばは稀ではないでしょうか。

もし、このパウロの手紙を持たずにオネシモが主人のもとに帰ったなら、どのようなことが彼を待ち受けていたかは見当がつきます。

ドアをたたく音がします。そこで、ピレモンの召使いが戸口に出て来訪者を見て主人に伝えます。「あの逃亡者オネシモが来ました」。そのとき、ピレモンの気持ちはどのようなものだったでしょうか。たとえ、主を信じていても一人の人間である以上、オネシモが自分にしたことを思い出せば心穏やかでないものがあったでしょう。主を信じている者だからと自分に言い聞かせ、心をなだめて復讐心を抑えることができたとしても、心の高ぶりはどうすることもできなかったでしょう。その結果、奴隷だったオネシモに対してピレモンは、せいぜい冷淡な態度か、禁欲的な態度を取ることしかできなかったでしょう。

けれども、オネシモではなく「使徒パウロが来ました」と召し使いが伝えたとしたら、どうでしょうか。家中が歓迎し、喜びと感謝と賛美で家全体が包まれたことでしょう。それほど、パウロは主にある

主なる神の愛の意味と価値

兄弟姉妹から愛され尊敬されていましたし、パウロ自身もまた皆が大喜びで歓迎してくれることを知っていました。そして今、パウロは盗人として主人から逃げたオネシモを、自分自身と同じように受け入れてほしいとピレモンに懇願しているのです。

果たしてピレモンが、パウロ自身を迎えるのとまったく同様にオネシモを受け入れることができたかどうかは、私たちには分かりません。しかし、パウロが書いたことは、神様の受け入れ方を意味することは間違いありません。

どのようなことがあっても、私たち主イエス・キリストを信じる者は、主イエス様のゆえに受け入れられています。これこそが、なされた救いのすばらしい結果です。神と人との間の和解と罪の贖いは、十字架によって完全になされたので、父なる神は主イエス様のゆえに、負債を負った者としてではなく、義なる者として私たちを受け入れてくださいます。

なぜなら、主イエス・キリストを信じ受け入れる者は、イエス・キリストの義のゆえに、義なる者として、聖なる神に受け入れられるからです。すなわちイエス様は、父なる神におっしゃいます。「どうか、彼（彼女）を罪人としてではなく、わたし自身のように、あなた（父なる神）に愛されている息子、娘のように受け入れてください」と。

主イエス様を信じる私たちは、御子イエス・キリストのゆえに主なる神が必ず受け入れてくださる、ということは何の疑う余地もありません。聖書にはっきりと記されています。

4 新しい人生の原動力となる

次に、まことの愛は新しい人生の原動力となることをみましょう。

戻って来たオネシモに会ったとき、ピレモンはパウロの願うように彼を受け入れるべきかどうか、迷ったのではないでしょうか。「オネシモ」という名前は、もともとは「助けになる」とか「役に立つ」という意味でした。それにもかかわらず、その名に反することを彼はしてしまったのです。もう二度とオネシモがそういうことをしないと、誰が言いきれるでしょうか。

パウロの手紙は、まさにこの問題を十分に配慮して書かれました。パウロはオネシモの負債を認めながらも、そのオネシモが今はまったく違う者となったことを保証し、次のように書きました。

> 彼は、前にはあなたにとって役に立たない者でしたが、今は、あなたにとっても私にとっても、役に立つ者となっています。（ピレモン　11）

オネシモは、今は役に立つ者となったということを、パウロがピレモンに保証したのです。主の御霊による新生は、オネシモの人生にまったく新しい力、聖なる神の愛の力が生まれたことを意味しています。パウロはオネシモのためにピレモンに懇願し、オネシモが役に立つ者となったことは、自分が経験して知っているところだと手紙に書いたのです。

私たちも以前は役に立たない者でした。そのことを主なる神はよく御存じです。けれども、主なる神に受け入れられた今、主の御霊によって新生した私たちは役に立つ者へと変えていただき、主のために、また他の人々のために用いられる器とされています。

> 神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。（ローマ　6・17～18）

主なる神の愛の意味と価値

ピレモンの心を動かしたのは、悔い改めたオネシモの態度以上に、そのオネシモの債務を負うと言うだけではなく、責任をもってオネシモを保証したパウロの愛であったといえます。

以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。

（エペソ　2・13）

私たちにとっても、主なる神の愛はただ単に過去の罪を洗い浄めるだけではありません。新しい人生の道をも備えてくださいます。これは決して私たち個人の努力の結果ではなく、主なる神の恵みと愛の力によるものです。

救いをもたらす主の愛こそが、キリストご自身の新しいいのちの力を提供してくださるのです。心から主イエス様を信じる人は、神の愛が「喜びの源」であり、「新しい人生への原動力である」ことを体験させられています。

5まことの希望を与える

最後に、神の愛はまことの希望を与えてくれるものであることをみましょう。

手紙の終わりのほうには次のように書かれています。

私の宿の用意もしておいてください。あなたがたの祈りによって、私もあなたがたのところに行けることと思っています。

（ピレモン　22）

パウロの手紙通り、再びピレモンに受け入れられたとするなら、オネシモの感動はさぞ大きなものだったでしょう。けれども、その感動が収まってからの毎日は単調な生活の繰り返しになったかもしれません。そのため、いろいろな誘惑によって以前の古い生活に逆戻りしそうにならないとも限りません。そのようなとき、彼はパウロが間もなくやって来るという約束を思い出して、新しく力をいただくことができます。

今、パウロはそれほど遠く離れた所にではなく、コロサイへ来る途上にあるかも知れない、もしかしたら今日にでも到着するかもしれない、と思うことができました。パウロが間もなく来るかもしれないという思いは、オネシモにとって大きな喜びであり、また励みともなり、心の支えとなっていたはずです。

間もなくやって来るパウロを悲しませてはいけない、喜んでもらえるような神のしもべにふさわしい生活をしなければと思ったことでしょう。もちろん主にある兄弟たちは心からパウロの宿を準備したことでしょう。

パウロが約束通り、コロサイにやって来たかどうかは分かりませんが、主イエス様が間もなく来てくださるという私たちの望みは確実に実現します。

そして「主は近い！」という事実は、毎日の信仰にとって最大の励ましとなります。主イエス様はきょう来られるかもしれません。必要なのは、その準備が十分になされていることです。その準備とは、「主に忠実に仕える」ということに他なりません。オネシモが毎日、忠実に主に仕えるようにピレモンに仕えていて、ある日突然、パウロが現われたとしたら、その喜びはどれほど大きなものでしょうか。オネシモは恐らく奴隷の状態にとどまっていたでしょうが、同時に主にある親愛なる兄弟でもあったのです。

彼がしばらくの間あなたから離されたのは、たぶん、あなたが彼を永久に取り戻すためであった

主なる神の愛の意味と価値

なく、「主イエス・キリストご自身」に他なりません。私たちは、主イエス様を信じ受け入れたから、主の愛を経験するようになったのです。

ですから、私たちは次のように証しすることができます。「主なる神の愛、すなわち、主イエス様は、私の痛みを共に分かち合ってくださり、私の債務を全部支払ってくださり、私のような者をも受け入れてくださるお方、新しい人生の原動力そのものとなり、まことの希望、生ける望みを与えてくださるお方です」と。私たちは神の愛を体験しました。

ですから、主の愛のゆえに、忠実にしもべとして主に仕えなさい！

のでしょう。もはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、すなわち、愛する兄弟としてです。

（ピレモン　15～16）

大切なことは、役に立つしもべとして、主にふさわしく忠実に仕えることです。「よくやった。良い忠実なしもべだ。」（マタイ　25・21）と主はおっしゃいました。また次のように教えておられます。

自分に言いつけられたことをみな、してしまったら、「私たちは役に立たないしもべです。なすべきことをしただけです。」と言いなさい。

（ルカ　17・10）

主が大いに愛してくださっているのですから、しもべとして、忠実に主に仕えましょう。主の愛とは、何か具体的なものや気持ちなどという性質のものでは

ナザレのあんちゃん

山田 ゆかり



主によって二〇〇〇年に救われ、二〇一〇年に吉祥寺集会に導かれました。

私は両親と兄の四人家族の中で育ちました。両親は共働きで忙しく、また夜遅くまで労働組合や政治的活動をしていましたので、兄妹で留守番をしていることが多かった幼少時代でした。父も母も無神論者でしたから、私たちは白か黒かはっきりとした意見や態度をとるように教育されていたかと思います。小学生になった私は、父に「人は死んだらどうなるの?」と質問しました。父は「人は死んだら終り。目を閉じると真っ黒になるだろう。いや真っ黒という感覚もない」と答えました。戦争を体験し、二度とあのような世の中にしたくない、と反政府反宗教を唱えていた人にとって当たり前の答えだったと思います。家族のためにまじめに働いていた父でしたが、性格の激しさからくる家庭内暴力に家族は翻弄されていましたので、母はいつも心労が絶えなかったと思います。私は手のかからない子供として位置付けられていました。末っ子で甘やかされていた面もありましたが、必死に周りの目を気にするいい子を演じていました。

十代になり、だんだんと体の成長とともに親が小さく感じられ、父に対して反感と憎しみを覚えました。いつの間にか、自分の罪について何も感じない冷酷で傲慢な人間となっていたのです。

高校卒業後、東京の大学に進み親元を離れました。そこで今の主人と出会い結婚しました。子供の頃あんなに苦労したのだから、人生の後半は幸せな家庭生活を送ることができるだろうと、楽観的に思っていました。しかし、二人に一致はなく、孤独からくる寂しさは、夫がいてもけっして消えないという事実だけが残りました。周囲から子供をつくることを期待されましたが、逃げ出したい気持ちでした。子供に対して自分は醜いことをしてしまうのではないかという恐れのようなものがあったのです。

三十代になり、仕事の無理がたたって頸肩腕障害という病気が与えられ、精神的に追い込まれていたときに、私にも主から恵みと憐れみがもたらされました。友人が一年前にクリスチャンとなり、一緒に祈ってほしいとお願いされたのです。彼女は、私と同じく小さい頃から家族間の問題を抱えていた方でした。私は、神様はどこかにいるけれど、神様と宗教とは違うと考えていましたので最初はお断りしました。しかし、もしかしたら私が祈ることで彼女に平安がもたらされるならと思い、初めて彼女のアパートで一緒にお祈りすることになりました。彼女の後について祈っていると、みことばが与えられました。

そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。（1ヨハネ 5・11）

さらにいくつもの祝福のみことばが与えられ、まるで聖書が生きて私に語りかけているような体験でした。友人は懸命に聖書を引いて解説してくれました。二人とも喜びと驚きでいっぱいになりました。私の失われていた人生は一八〇度転換して、新しい人生へと変えられました。長年放置されていた心の暗闇に主の光がもたらされ、私は救われました。天国はある！

自分のことをすべて知っている神様がおられるのだと全身に響きわたりました。そして、フタをしていた自分の罪があふれるように思い出され、悔い改めへと導かれました。生まれて初めて知る、言葉にできない平安でした。

ところが、友人の勧めで平日に礼拝のある教会に通い、牧師の開くセミナーを受けることになって聖書を読み解くうちに、ふつふつと天の御父への反感がこみ上げてきました。なぜ人間を造ったのか、思い通りになるロボットのような人間を造ればこんなことにならなかったのではないか、動物と植物だけでよかったのではないかと、すべて神様が悪いのだと決めつけていました。三位一体と言われますが、イエス様と聖霊様は優しく受け止めてくださると思えても、御父との間には境界線が引かれ、とても遠い存在にあるようでした。旧約聖書も怖くて読みたくありませんでした。信仰を捨てて白紙に戻そうかと真剣に悩みました。ですが、主は一筋の道を示してくださいました。マタイの福音書に書かれていたイエス様のことばが目に留まりました。

わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか。

（マタイ　27・46）

なぜか涙が止まりませんでした。イエス様は本当にこの地上に来てくださり、人間と同じ血と肉を持って苦しみ、十字架にかけられたのだと感じ、胸がしめつけられました。

キリストは、人としてこの世におられたとき、自分を死から救うことのできる方に向かって、大きな叫び声と涙とをもって祈りと願いをささげ、そしてその敬虔のゆえに聞き入れられました。

（ヘブル　5・7）

一度もたれた主との繋がりは切れることがありませんでしたが、その教会には三ヶ月しか通わず、友人とも離れることになりました。

主と自分だけの信仰となりました。聖書の内容や登場人物についてほとんど何もわからない状態でしたし、お祈りもろくな言葉遣いではありませんでした。イエス様のことを、「ナザレのあんちゃん」と馴れ馴れしくも親しみを込めて呼んでいました。ヤクザ上がりの牧師さんがイエス様のことをアニキと呼ぶのと同じなのか、私の信仰が幼すぎたのかわかりませんが赦していただいていました。

いろいろな問題を抱えながらも二〇〇二年に子供を授かりました。結婚してから七年がたっていましたが、夫は私以上に喜んでおりました。

私には、子どもが与えられた大きな喜びの一方で、教会に通わなくてもよいのかという不安がありました。子供を乗せたベビーカーを押しながら近所の教会の前でお祈りしてみましたが、どこにも導きはありませんでした。今思えば怪しい親子連れに見られていたのかもしれません。聖霊様の導きを示していただいていましたので、つらい試練があっても、自分はこんなにも愛されているのだと満たされてはいました。

子供が小学校に入学し子育ても一段落した頃、お友だちに誘われて行った習い事の先生が、吉祥寺集会の姉妹でした。一生懸命探した時には見つからず、すべてを諦めて導かれました。姉妹から集会の本や

小冊子を読ませてもらい、家庭集会に声をかけていただきました。前の教会をやめてから十年の月日が流れていました。

その家庭集会では、初めて集われた方たちと一緒に食事を交えながら、ベックさんのユーモアあふれるお話を聞かせていただきました。その中で、「神様はなぜ悪魔を造ったのかわからない。天国にいったら聞いてみるよ！」と笑顔で話されているのを聞いたとき、何十年も宣教された方が、わからないものはわからないと言われた子供のような素直さに心打たれました。私のような者が、なぜどうして主はこの世界を創造されたのか、ロボットを造ればよかったんだ、と天に向かって叫んだことを後悔しました。この集会に身を置いていいんだよ、と言われている気がしました。

吉祥寺集会から出されている本を半年かけてほとんど読ませていただきました。読むことがこんなにも嬉しかったことはありません。パウロがどういった人物なのかなど、内容も少しずつ明らかになり、目からうろこが何枚も落ちていきました。メッセージや証し、賛美などを通して、主がお一人おひとりを愛しておられることをたくさん見せていただきました。ひとりよがりの信仰を続けていた者にとっては、今でも感謝の連続です。

姉妹たちのお祈りに支えられながら、翌年の御代田のキャンプで息子も救われました。息子は、初めてのお祈りで、神様はいつもいてくださり見守っていただいていることを感謝していました。しかしその後すぐに、彼自身に試練が与えられました。私も夫も鈍い者で、苦しみに気付いてあげることができませんでした。ですが主は、息子の心にそっと寄り添い語りかけていただいていたそうです。息子は後で、「あれはイエス様だったよ」と教えてくれました。私は、子供のことを自分の力で何とか解決しようと、主よりも前に出てしまう愚かな母親でした。自分を責め続ける私のことを祈っていただいていた姉妹を通して、ベックさんとの交わりの場に連れられていきました。自分の思い煩いを聞いてもらった後、ベックさんから、創世記には知識の木以外にもう一本木があったこと、そして天の御父にイエス様を送っていただいたことを話していただきました。…主と自分との問題でした。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。（ヨハネ　3・16〜17）

時間はかかりましたが、気が付けば私の知らないところで、息子はせっせとお祈りをしていました。「いたずらしてごめんなさい。落とし物忘れ物を見つけてください」と。息子と兄弟姉妹の関係にさせてくださったことが、自分が救われた時よりも嬉しいのです。

自分の罪が明るみに出るたび、辛く苦しいこともありますが、最初に与えていただいた「そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです」（1ヨハネ　5・11）の聖句の中にある、イエス様と同じ永遠のいのちが、私のよう頑なな者にも与えられているのかと思うと、心がいつも温かくなります。

私は主の御手で造られ、自由意志を持たせていただきました。聖霊様を宿していただきありがとうございます。また、集会の方たちと一つとなってお祈りできることも感謝です。いつの日か、天国に行きましたら、いのちの木に実をいただく恵みを待ち望み、希望を持ってこの地で暮らしてまいります。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。
主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに
伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御
名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死
の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを
恐れません。あなたが私とともにおられますから。
あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。
（詩編　23・1～4）

山田ゆかり（やまだゆかり）
一九六八年生まれ　愛知県出身
東京造形大学美術学科卒業
夫／長男

主に信頼する者は、失望させられることがない

佐々木　史子



右から夫の壮吉さん、長女の玲子さん、史子さん、長男の悠介さん、
後列が次男の亮介さん

私は一九四七年に名和信美、瑞枝の四番目の子どもとして生まれました。経済的には豊かでなく、不平不満もありましたが、今思えば平穏な生活でした。末っ子でしたので、あまり親の目は届かず、それを良いことに自分のことだけを考える、自己主張の強い子どものまま大きくなりました。

二十八歳の時に結婚しましたが、主人は私には過ぎた人と、両親はとても気に入り、よくあんな良い人が結婚してくれたものだと言っていました。三人の子どもが与えられ、病弱の子もおりましたが、その時その時ただ忙しく夢中でした。

父は次男でしたので家に仏壇はありませんでしたし、親族の死を体験することもなく、死はとても遠い存在でした。しかし、死んだらどこへ行くのだろう、私という存在はどうなるのかと考え、奈落の底に落ちて行くような不安に襲われることも何度かありました。でも、しばらくすると不安は消えるので、深

くは考えないようにしていました。

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。

（イザヤ　59・1～2）

子育てが一段落した頃、胃に激痛があり胃潰瘍と診断されました。寝ていると背中とお腹に一本の錐（きり）が刺し通されているかのようでした。それからは次々と体調が悪くなり、医者通いとなりました。強度の冷え性で眠れなくなり、夜中に何度も主人を起こし付き合わせていました。その頃、主人から、「これからは自分のやりたいことがあるので、自分に自由に時間を使わせて欲しい」と言われました。主人は、私中心の生活に合わせてくれていただけに、私は、安心して立っていた所で足元をすくわれ、居場所がなくなった思いがしました。家庭に対する自分の思いと考えを言い募り、口論し続けました。自分の非に気づかず、主人を私の思い通りにしたいと思っていましたので、主人との間の溝はますます深くなっていきました。孤立感、虚無感で体調はますます悪くなり、それでも自分に原因があるとは思わず、私の辛さを分かってくれない主人を心の中で責めていました。何よりも何よりも自分が大切だったのです。

あなたが繁栄していたときに、わたしはあなたに語りかけたが、あなたは「私は聞かない。」と言った。わたしの声に聞き従わないということ、これが、若いころからのあなたの生き方だった。

（エレミヤ　22・21）

人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。欲がはらむと罪を生み、罪が熟すると死を生みます。

（ヤコブ　1・14～15）

それまで何でも主人に頼っていた私は、あまりの体調の悪さに、自分でどうにかしなくてはと、気功教室に通い始めました。通っているうちに体調はすっかり良くなり、そこで色々な人たちに会いました。そのうちの一人が、しばらくして巡り合った指導者で、その人は心を病んでいる方々、学級崩壊している教師、長い間引きこもっている若者たちに「神は愛です」と伝えていました。その指導者は言いました。「救い主はイエス様だけです。私たちの罪のためにイエス様は十字架に架かってくださり、そして三日後に復活された。聖書こそは神様のみことばであり、それ以外には人間が頼みとするものはこの世にはない」。そう聞いた時、ああそうなのだとストーンと胸に入ってきました。

こうして聖書を読み始めたのですが、さっぱり分かりません。それで註解書を求めて書店を巡ることになったのですが、新宿の聖書ショップ「オアシス」で、ベック兄の「神の愛」、「光よあれ」を手にしたことから道が開かれました。「他の註解本とはまったく違う！」と夢中になつて読みました。すぐ、本に書かれてある地図をみながら吉祥寺キリスト集会の礼拝に行きました。室内に入りきれないほどの方々がイエス様に礼拝を捧げておられました。ただ嬉しくて涙が止まりませんでした。二〇〇四年頃でした。

あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない。この民の心は鈍くなり、その耳は遠く、目はつぶっているからである。

（マタイ　13・14～15）

それから時々吉祥寺には礼拝に行きましたが、集会の方とは誰とも話をすることはありませんでした。イエス様を伝えているところはどこも同じと思っていました。癒しの場で病気が治るのも、不思議な体験も、聖書に記されている神様の御業を見せていただいているのだと思っていました。

イエスは言われた。「惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名乗る者が大ぜい現われ、『私がそれだ。』とか『時は近づいた。』とか言います。そんな人々のあとについて行ってはなりません。

（ルカ　21・8）

呪文を唱える者、霊媒をする者、口寄せ、死人に伺いを立てる者があってはならない。これらのことを行なう者はみな、主が忌みきらわれるからである。

（申命記　18・11～12）

すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。悪はどんな悪でも避けなさい。

（1テサロニケ　5・21～22）

二〇〇六年秋に一人住まいの長兄が亡くなった際に、「私はイエス様を唯一の神様と信じているので葬儀には出席できない」とすぐ上の兄に伝えたところ、カルトにでも入ったのかと激怒されました。しかし、そのことを通して兄にもイエス様の話ができ、その後親族に集会の本を渡すことができました。はっきりイエス様を証しすることで道が開けてくるのです。そして、それまで所属していた所にそれ以上いることは苦しくなりました。二〇〇七年一月に、「これからは聖書に基づきイエス様に礼拝を捧げたいのです。今までありがとうございました」と指導者に手紙を出し、キリスト集会に集うことにしました。

それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。

（2コリント　6・17～18）

二〇〇七年一月二十七日、初めて国立家庭集会でイエス様にある方々とお会いした時の嬉しさは言葉に現わすことができません。その時から今に至るまで、主は国内海外のキャンプに運んでくださり、機会あるごとに家庭集会に参加させていただいています。

私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（2コリント　4・18）

集会に来るまでは、病気の癒しなど体験した数々のことを、人の手によって現わされた奇跡だ、と思っていました。初めてベック兄とお交わりさせていただいた時、「99パーセント聖書を使っていても1パーセントでも違っていたら、それは全部違っているんだよ。奇跡はすべてイエス様です」とおっしゃいました。今は少しそのことが分かってきたように思います。それから友人知人にもいろいろなことが起こされ、イエス様をお伝えし、信仰の本をお渡しできました。

同じ時に集会に導かれた娘は、二〇一〇年に集会の兄弟と御代田で結婚式をすることとなり、親族一同友人知人を御代田の福音センターに主が招いてくださいました。娘とは、お互いイエス様に出会う前は長い間争いが絶えず、いずれ音信不通になってもおかしくないほどの仲の悪さでしたが、イエス様にある姉妹同士となってからは主にある一致を与えられています。

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。
（エレミヤ　17・9）

このみことばを、娘と互いに向き合って言いあえる恵みと主の憐れみには、感謝しかありません。今まで自分が思ったこと、してしまったこと、すべてのことが聖書には記されています。不平、不満、愚痴、悪口、泣きごと、文句、これが私の正体です。振り返り自分を見れば、消えてなくなりたいほどの罪を犯してきた者ですが、このどうしようもない私のためにイエス様は十字架に架かってくださり、そして蘇ってくださいました。

もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。（ガラテヤ　2・20）

そして女に、「あなたの罪は赦されています。」と言われた。
（ルカ　7・48）

私は嬉しさのあまり、集会でのメッセージや証しを無理やり主人に聞いてもらっていました。主人は、しばらくは聞いてくれていましたが、「君は僕をどうしたいのか」と言いました。私が、「イエス様のもとであなたと一緒に歩んでいきたい」と言った時、「あなたの信仰は認めているけれど、そこまで君は僕を支配したいのか」とあきれていました。夫としても父親としても今までこんなに良くしてくれたのに、私は本当に感謝のない者でした。それゆえ夫は、まだこれ以上求めるのか、と思ったのでしょう。

その後イエス様は、「申し訳ありませんでした」と主人に謝る機会を備えてくださいました。主人は、今は集会の兄弟姉妹ともお会いする機会がたくさん与えられていますが、息子二人は「僕は、イエス様はいいです」と言っています。イエス様を主と仰ぎ集っている兄弟姉妹と共にひとつのいのちを頂きこれからも歩ませていただきますので、最善の時に家族、親族、友人、知人を必ず救ってくださるみことばの約束を感謝しています。

彼らはあなたの家の豊かさを心ゆくまで飲むでしょう。あなたの楽しみの流れを、あなたは彼らに飲ませなさいます。いのちの泉はあなたにあり、私たちは、あなたの光のうちに光を見るからです。
（詩篇　36・8～9）

あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。
（ヨハネ　3・30）

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。
（1テサロニケ　5・16～18）

いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。
（ピリピ　4・4）

10人の証し

Unser HERR lebt

佐々木史子（ふみこ）
一九四七年鳥取県で生まれる。
東京都世田谷小学校・山崎中学校・成徳学園高等学校卒
家族　夫・壮吉（そうきち）、長男・悠介（ゆうすけ）、長女・玲子（れいこ）、長女の夫・村上浩生（こうせい）、孫・喜一（きいち）、次男・亮介（りょうすけ）

あとでわかるようになります

古田　雅一



妻の繭子さんと

1 救い

「あなたの神である主を試みてはならない。」と言われている。（ルカ　4・12）

私は、両親と弟の四人家族の中で最後にイエス様を信じる者に変えられました。中学二年の時、学校でのある不祥事、暴力事件がきっかけです。クラスメートの悪意に満ちた虚言を盲信した担任教師が、謂（いわ）れなき責めを私に負わせようとします。生まれて初めて体験する、自分ではどうにもならない理不尽。

「やはり神はいない、いるならこんな馬鹿げた理不尽を許しておくはずがない。もし本当にいるというなら存在を証明してみてくれ、正義を明らかにしてこの状況から救いだしてくれたら信じるから」

神義論を気取った不遜かつでたらめな理屈でした

が、驚いたことにこの「試み」は数日後に応えられ、主はそのご臨在を明らかにしてくださいました。

すべての嘘をあばき正義を回復してくださったばかりか、関係者全員の平和的な和解を成し遂げてくださったのであります。これが私の信仰の原体験となり、高校二年の時、弟と一緒に受洗する恵みに与りました。

2 就職

一九九〇年、理工学部でコンピュータサイエンスを修めた私は、大学卒業後日本ＩＢＭに入社しました。一九九八年、入社以来順調にきていた仕事に初めて大きな試練が訪れました。

ある主要顧客の担当セールスマネージャーであった私は大きな契約を受注しました。ところが、いざ実施の局面に入ると、技術的な理由から契約内容の履行が極めて困難であることが明らかになりました。当初、高慢な私は自力で解決できるだろうと高を括（くく）っていましたが、事態は徐々に深刻になり、プロジェクトは遂に会社のブラックリストに載る寸前までになりました。この間、解決策を求めて土日も休まず出勤していましたが、万策尽きた私は久しぶりに日曜日に休みをとり集会に行くことにしました。

礼拝に出てはみたものの、仕事のことが頭から離れず静まることができません。しかし、福音集会のメッセージを聞いたとき、突然私の目は開かれ、自分がまったく主により頼んでいなかったことに気づかされました。自分で動かないことの重要性を説いたメッセージでした。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手

で、あなたを守る。見よ。あなたに向かっていきりたつ者はみな、恥を見、はずかしめを受け、あなたと争う者たちは、無いもののようになって滅びる。あなたと言い争いをする者を捜しても、あなたは見つけることはできず、あなたと戦う者たちは、全くなくなってしまう。あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、「恐れるな。わたしがあなたを助ける。」と言っているのだから。

（イザヤ　41・10～13）

翌日の月曜日から、私は自分で動くことを一切やめ、祈りに専心することにしました。もう頼るのはイエス様の力、イエス様の働きだけと決めたのです。それまではプロジェクトリーダーや他のメンバーに声を荒らげて解決を迫りながら、自分でもなんとかしようと奔走していた私でしたが、文字通りこの日を境に自分からは何もしなくなりました。

数日が経過したある日、突然お客様から一つの提案が出されました。ＩＢＭでは絶対に思いつかない妙案でしたが、逆の言い方をすれば、ＩＢＭにとっては非現実的でまず受け入れられないことを意味していました。

しかし、祈った結果起こったことなのだからと上司に報告したところ、意外にも役員に諮ってもらえることになりました。そして、驚いたことにこの妙案は承認され、事態は一気に解決に向けて動き出しました。

私が自分で動くのをやめた途端、問題も人心も整理されていったのです。この解決は主が起こされた奇跡と確信しております。

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」　（ローマ　10・11）

3 転機

この問題が落ち着きを見せ始めていたある日、母から一本の電話がありました。父が身体に変調をきたしたという知らせでした。父は、残りの人生を主に捧げたいと五十歳でリタイアしたものの、半年後、主のご命令に従いサーヴァンツインターナショナル株式会社を設立し、それから数年後、米国のある半導体メーカの国内総代理店として営業を始めていました。

母はその電話で、サーヴァンツの将来のことと私自身の関わり方について祈るよう勧めましたが、すでに会社を手伝っていた弟が継ぐものと思っていましたし、また当時私には昇進の予定が漏れ聞こえていたこともあり、私が関与することは御心とは思えないと心の中で独りごちていました。ところが、念のため弟に意向を再確認したところ、意外にも弱気な答えが返ってきて、急転私の心に祈りの負担が芽生えました。

しばらく妻と一緒に祈った結果、サーヴァンツへの転職は自分に与えられた使命と確信し退職を決めました。退職が承認されると父はまるで何事もなかったかのように復調し、すでに辞表を出してしまっていた私は主のご計画の手順をただただ不思議な気持ちで見ておりました。

火急の必要が去ったこともあり、父と相談して、弟を日本に戻し、代わりに私が家族帯同で米国に赴き現地子会社を設立することを決め、翌一九九九年にロスに移住しました。妻と二人の子どもと暮らしたロスでの二年半は、その後の人生にとってかけがえのない豊かな時間になりました。信仰面では、ロサンゼルス集会の礼拝に毎週家族で導かれ本当に多くの恵みをいただきました。仕事面では、現地の取引先の社長以下多くのキーマネージメントと緊密な人間関係を構築でき、そのことが後に会社の危機を助けてくれることになろうとはまったく想像もしていませんでした。

4 計画

二〇〇一年、現地法人のオペレーションも軌道に乗ったことから日本に帰任することにしました。その八ヶ月後、クリスマスの日に突然父が倒れました。母からの電話から三年、今度は本格的な脳梗塞で左の半身が麻痺しまったく動かなくなりました。突然会社のトップが倒れたことで、取引先の半導体メーカとの関係悪化を思い煩いましたが、現地からは拍子抜けするほど楽観的なメッセージが届けられ、その瞬間、主の完全なご計画が明らかにされたように思いました。

私がどうしてあのタイミングでＩＢＭを辞める必要があったのか、そして米国に長期で駐在する必要があったのか、すべてがイエス様の悠久なるご計画の一部であったのだと腑（ふ）に落ちました。

二〇〇五年、その半導体メーカの営業責任者から突然メールが入りました。そのメーカの屋台骨とも呼べる事業を他社に売却することを決めたというのです。その事業の売却は、とりもなおさず当社の国内代理店権の解除、引いてはそれまで安定的に得ていた収益を大幅に失うことを意味しました。

私の最も恐れたものが、私を襲い、私のおびえたものが、私の身にふりかかったからだ。

（ヨブ　3・25）

サタンは人の心に不安や恐れの思いを入れ、主への信頼を揺さぶり、主から引き離し、自力でなんとかしようと仕向けます。神に正しい人と認められたヨブでさえ、主からの祝福を感謝して受けていた一方で、サタンが入れた恐れとおびえの思いを受け取ってしまっていたことがわかります。私にも同じようなことが起こったのかもしれません。

私は、当社の収益の大半を稼ぐ事業が取り上げられないか、いつも心配し恐れていました。ヨブ同様、私の心にサタンが入れた恐れとおびえの思いを受け入れて、知らずにサタンの思いに同意していたのかと自分を探りました。

一年後、予想したとおり収益へのダメージは深刻な結果をもたらしていました。回復できる短期的な目途もたたず、会社存続のために早急に固定費を削減しなければなりません。同族中小企業の経営者は自分をクビにするという責任の取り方ができません。ひたすら祈りにあけくれ、みことばを読みあさり、繰り返し主に御心をお尋ねした結果、最終的に組織を大幅に縮小することになりました。主に祈って決めたことではありましたが、私にとっては苦渋の決断でした。

しばらくして、解職した社員の一人と話す機会が与えられました。未経験ながら営業職を志望して入社した主にある若い兄弟でした。驚いたことに、あのとき自分を選んでくれて有難かった、と彼は言うのです。営業の仕事に限界を感じていたが、依願して入社したこともあり辞めたいとも言えず悩んでいたところ、新しい道を開いてくれて本当に感謝しているというのです。なんということでしょうか。正直、少しだけ救われた思いもありましたが、なによりも、人の思いはなんとひとりよがりで行き届かず、的外れであるのかと思い知らされました。私は何も見えていなかった。社員のことを何もわかっていなかった。私たちが本当に頼みにできるものは、人知を超えて備えられる主の最善だけであると改めて学ばされました。

二〇〇八年、突然の金融不況、いわゆるリーマンショックが勃発し当社も厳しい状況に陥りました。ひどい月では受注が通常の半分ほどに落ち込み、収益の先行き不透明感は未曾有のものでした。そのような苦しい時、主は再びご計画を明らかにしてくださいました。私が駐在時代一緒に仕事をしていたアメリカ人

から突然連絡があり、驚いたことに彼の転職先のイスラエルの企業の代理店をやらないかと言うのです。私がロスに駐在することがなければ、このこともなかったでしょう。主のご計画の完全さに驚嘆するばかりであります。

サーヴァンツは今年（二〇一四年）創立二十五年を迎えます。私自身は、その後半の十五年を共に歩んできましたが、この間一日も欠かすことなく会社の事業成功を祈ってきました。しかし、あるとき、その成功を願う動機を主に探られたことがあり、信仰の先人である内村鑑三が書いた文章に出会いました。

「成功はこれを天にまかし、おのれは日々なすべき事を正直になすことであります。すなわち、成功を度外視して事業に従事することであります。そうすれば、成功するものならば真正に成功します。失敗しまするものならば立派に失敗します。成功必ずしも名誉ではありません。失敗必ずしも恥辱ではありません。卑しき手段をもってなしたる成功は恥辱であります。清き手段をもって取ったる失敗は名誉であります。世には金（かね）をためんと欲する人がありまたあります。金をためんと欲して、金はたまるものではありません。金がもしたまりまするならば、自然にたまるものであります。ためる金とたまるかねとの間に多くの差異があります。」

人は自分の幸福を信じて願いが叶うよう祈ります。しかし、皮肉なことに、今日の願いの成就が必ずしも将来の幸福を保証しないことは真理であります。時に、願いの成就が困難のはじまりとなることがあります。願って入社した会社で人間関係に悩む、願い叶って結婚したのに今はまったく円満ではない、念願の子供が与えられたが育児がうまくできない、など枚挙に暇（いとま）がありません。時間が経過してはじめて自らの願いの不完全さを知ることになります。人は自分の道を予（あらかじ）め探り極めることができません。永遠への思いを抱きますが果たしえません。それこそは主なる神の領域だからであります。

私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。（ピリピ　4・19）

会社の将来はどうなるだろうか？将来の必要はちゃんと満たされるだろうか？経営者はともすると今日の不足にばかり目を奪われ、その不足を埋めることに汲々（きゅうきゅう）としてしまいますが、それこそが不信仰への誘いであろうと日々感じます。

振り返ってみれば、私がＩＢＭを辞めたことも、米国に駐在したことも、帰国後に父が倒れたことも、そのときには喜ばしいものではなかったり、意味が不明だったりしましたが、主はそれらすべてを益としてくださいました。会社の屋台骨であった事業が売却されたことも、それによって組織を縮小しなければならなくなったことも、私が経営の成功として祈り願ったものとは真逆のことでしたが、主はそれらをもすべて最善に導いてくださると信じます。なぜなら、聖書にはそう書いてありますし、これまで私が経験したことは正にそうであったからです。

古田　雅一（ふるた　まさかず）
一九六六年　東京生まれ
都立八王子東高校、早稲田大学理工学部電気工学科卒
日本アイ・ビー・エム株式会社を経てサーヴァンツインターナショナル株式会社　代表取締役社長
妻・繭子（まゆこ）、長男・蒔人（まきと）、
長女・陶子（とうこ）

真理はあなたがたを自由にします

古田 繭子



左から繭子さん、お母さま、長女の陶子さん、後列が長男の蒔人さん

私たちにではなく、主よ、私たちにではなく、あなたの恵みとまことのために、栄光を、ただあなたの御名にのみ帰してください。（詩篇　115・1）

すべて主のご栄光だけが現されますように、と祈りつつ。

主の憐れみにより私は幼稚園から高校までキリスト教の学校に通い、この世界をお造りになった全能なる神様がいらっしゃる、ということを疑ったことはありませんでした。中学生のころ吉祥寺集会へと導かれ、洗礼を受けました。

大学生から社会人のころは、毎週集会へ集ってはいても心は主から離れていました。私は、いつもこの世の楽しさと良心の呵責との間を行ったり来たりしておりました。ある日の日曜礼拝で聖歌の「九十九ひきの羊は」が賛美された時、涙が止まりませんでした。この私を、主は「迷いしものも我がもの、いかに深き山をもわけゆきて見いださん」と仰ってくださるのでした。なんというご愛の深さ、なんという憐れみでしょう。ずっとずっと探され続けていたのだと知った時、私は主のご愛にすっぽりと包まれていました。

「このしもべが何者だというので、あなたは、この死んだ犬のような私を顧みてくださるのですか。」…こうして、メフィボシェテは王の息子たちのひとりのように、王の食卓で食事をすることになった。

（2サムエル　9・8、11）

メフィボシェテが王の息子たちと同じ食卓で食事をしたように、何の働きもないこの私が愛されている、というその事実にただ涙するばかりでした。

二十六歳の時に結婚へと導かれました。すぐに赤ちゃんが与えられましたが、切迫早産ぎみで四ヵ月ほど安静入院を強いられました。元気なのに何もできずにただ寝ているだけの毎日はとても辛く、明けても暮れてもいつ退院できるか…そのことで頭がいっぱいでした。当然、平安や喜びはなく、私は苦しみのうちに主に叫んでおりました。

いつとか、どんなときとかいうことは、あなたがたは知らなくてもよいのです。それは、父がご自分の権威をもってお定めになっています。

（使徒　1・7）

このみことばで、主は私の凝り固まった心を解放してくださいました。いかに自分の思いが狭くつまらないものかを知らされました。私に関わるすべては主が権威をもってお定めになっている、そのことこそ、はるかに安心で価値のあることだったのです。

その後、無事に長男が生まれ、しばらくして二年ほどカリフォルニアで過ごし、ロサンゼルス集会に集い

ました。大きな吉祥寺集会の群れを離れての信仰生活でした。飢え渇きをもって信仰書を読んでいた時、主は臨んでくださり、「十字架で私も共に死んだ事実、血潮の価値」をはっきりと覚えました。自分自身がどうであるかということとはまったく無関係に、ただ主が十字架で流された血潮ゆえにいつでも大胆に主の御前に出ることが許されている、こんな、考えられもしない恵みが私のような者にあっていいのでしょうか?本当に十字架のみわざは不思議です。

ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

（ヘブル　4・16）

それまで礼拝には義務的な感覚を持っていましたが、この時以来、主を礼拝したい、賛美したい、という思いに変えられていきました。

吉祥寺集会に集い三十年ほどになりますが、いつも喜んで、霊的に満たされて…というわけではありません。ひと時、集会に対する猜疑心がとても強くなり、まったく喜びのない日々を過ごしていました。どこに立ったら良いのか分からなくなり、兄弟姉妹を愛せなくなりました。苦しくていつも祈っていました。夫婦でも同じ思いで毎朝祈っておりました。ある日曜日、礼拝に身が入らず心の中で叫ぶように祈っていました。すると心にポコッと「なぜむしろだまされていないのですか」という言葉が浮かびました。その時はそれほど気にも留めず、それがみことばであることすら気付きませんでした。

時を同じくして、主人はある信仰書を通して主から示しをいただいていました。主人からそのことを告白された時、あの時の礼拝で浮かんだ言葉が主からの言葉であったと確信しました。私たち夫婦の切実な祈りに主は分かりやすく答えてくださったのです。それは、今もこれからも一生続く、私にとって本当に尊い主の学びです。私は、集会というところは人の集まりなのだからその中でどうしても愛せない人がいても当然だと考えていました。しかし主のお考えは違いました。

自分を愛する者を愛したからといって、あなたがたに何の良いところがあるでしょう。

（ルカ　6・32）

三浦綾子さんの「氷点」を読んで、「愛するとは感情ではなく意思である」と学びました。私たち信仰者は、日々の歩みの中で自分に愛のないことをこれでもかこれでもかと主に示されます。だからこそ意識して祈ること、自分の全エネルギーを使って愛することを意識すること、主はその心をいつも望まれているのだと分かりました。信仰的に優れていること、正しいこと、集会に欠かさず集うこと、奉仕をすること、交わりを持つことなど、これらの良いと思われることすべてに勝って「愛し合うこと」を主は喜ばれるのだと知りました。なぜなら神は愛だからです。

たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。

（1コリント　13・1）

愛するということは、その対象がどうであるか、相手が悔い改めたか、謝ったか、良い子になったかなどまったく関係なく、いつでもどんな人をも愛せよと主は命じられます。また、それは相手と自分の問題というより、むしろ、ただ主と自分だけの問題なのだと知りました。なぜなら神がそのように私たちを愛してくださったからです。

私たちがまだ罪人であったとき、・・・神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

（ローマ　5・8）

「真っ黒な罪人」という人間共通の核の部分は、私もあの兄弟もこの姉妹も皆同じであり、そこに立った時、表に現れるその人の性質や行いや罪の違いなど、とるに足らないつまらないものであるとはっきりと示されました。私は表面的な目に見えることに気をとられて、違いばかりが目についていたのです。信仰者である私たちはお互いに核まで踏み込んだら主にあって必ず愛し合うことができる、と真に迫って主は私に語ってくださいました。

そののち、思いもかけず尊敬する義理の両親が集会を離れることになりましたが、私たち家族は残りました。主の導きはそれぞれに違っていました。

あなたがたは互いに「主は何と答えられたか。主は何と語られたか。」と言うがよい。しかし「主の宣告。」ということを二度と述べてはならない。主のことばが人の重荷となり、あなたがたが、生ける神、万軍の主、私たちの神のことばを曲げるからだ。

（エレミヤ　23・35～36）

同じことを祈っていても主の導きが同じとは限らない、主は祈り求めたその人にとって一番よいものを備えてくださるお方です。その人の祈りの結果について他人はとやかく言うことはできないのだと、このみことばで学びました。なぜなら主が語られたからです。だからこそ、私たちはそれぞれの信仰の歩みを尊敬し、愛し合うことができるのだと強く思いました。

私たちが頼れるお方は鼻で息をする人間ではなく、全知全能の神お一人だけです。そうして、それぞれの導きが、それぞれの歩みが、美しく調和して主の喜ばれる信仰者の愛の世界が、主によって造られるのだと感じました。

義理の両親とは今も、共に食事をし、祈り合い、愛し合える恵みを変わらずに主からいただいています。同じ信仰を持つ者とされていることは、何と幸いなことでしょうか。

二〇二三年五月に膠原病を患う実母が認知症と診断され、八月には首の骨折で入院手術、同じ年十一月には常より生涯医師として働きたいと言っていた実父が脳梗塞で倒れました。怒濤の二〇二三年を終えた今も介護の日々ですが、主は遠く先の展望を見せてくださるのではなく、むしろ次の一歩だけをはっきりと示してくださるお方であることを感じています。

われらしばしばかく言えり
もし見るを得ば　また知るを得ばと
されど神は愛もてヴェールをかけ
われらの道をかくしたもう
われら行く手に横たわれるものを知らず
さればこそいよいよすがりまつるなれ
彼は生命の終るまで導きたもう
ただ彼に寄りたのみ　従いまつれ

（荒野の泉　七月二十九日）

父はリハビリ病院へ入院中、「今度の金曜日には退院する」と言い張ったことがありました。生来頑固な父ですから、私たちの言うことに耳を貸すとは思えません。祈り会で「どうか父がその思いから解放されますように、私にはできませんがあなたさまは何でもおできになるお方ですので感謝します」と祈りました。その日の午後父の所に行きますと、「今度の金曜じゃなくていいや」と言います。こんな小さな者の祈りに主はあっという間に応えてくださったことに驚き、感激で胸がいっぱいになりました。主は人

10 人の証し

Unser HERR lebt

の心の内さえ変えることのできるお方なのです。これは何でも祈らないともったいないぞ、と心から感じたことでした。

そのうち、とても仕事を辞めそうになかった父が自分から仕事を辞めると言い出しました。これは家族の長年の祈りでした。真実なる主にただただ感謝です。

また認知症の母はいろいろなことができなくなり、話すことも何を言いたいのか分からないことが多くなりました。心穏やかに母と接したいと私がいくら思ってもむなしく、すぐにイライラして声を荒げてしまうのでした。せっかく母と過ごしてもこれでは何の意味もないではないかと、私はその度に自己嫌悪の泥沼に落ち入りました。そんな時ある姉妹が母の様子を聞いてくださいました。母の様子と共に自分の情けない現状を伝えると、姉妹は「大丈夫！まゆちゃんはいい人じゃないから！」と快活に言ってくれました。ハッとしました。そんなこと分かっているつもりでしたが、いつの間にか勘違いしていました。

ひょうがその斑点を、変えることができようか。もしできたら、悪に慣れたあなたがたでも、善を行なうことができるだろう。（エレミヤ　13・23）

私の内に寛大なる広い心があるでしょうか？いつも穏やかで平安なる心があるでしょうか？真実なる愛があるでしょうか？嘘のない誠実な心があるでしょうか？「そんなもの無くて当然だよ、だから私のところに来て重荷を下ろしなさい」とイエス様はいつでも私を深いご愛で包んでくださいます。ああダメな者で良かった、貧しい者で良かった、病気の者で良かったと思いました。なぜならイエス様は地上を歩まれた時、優等生ではなく、取税人や姦淫の女、病気の者を選んで共に食事をしてくださったからです。主の愛の法則はあまりにも広く深く、不思議でいっぱいです。

愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。

（1ヨハネ　4・18〜19）

真理はあなたがたを自由にします。

（ヨハネ　8・32）

主に目を向けた時、主に愛され、守られ、希望を与えられ、自分からも他人からも解放され、本当に自由であることの素晴らしさを感じています。

古田繭子（旧姓・櫻井　ふるたまゆこ）
立教女学院高等学校卒、明治薬科大学薬学部卒
夫・雅一（まさかず）、長男・蒔人（まきと）、
長女・陶子（とうこ）

愛も憐れみも自己犠牲もイエス様の約束ですから感謝です

古田　知士



妻の美知さんと

私は一九六九年九月に生まれました。小学校二年生まで調布市で過ごし、その後に八王子市へ引っ越しました。まず母が主に導かれて信仰をもち、その信仰を通して父が救われ、両親がいただいた憐れみと御恵みを目の当たりにして、私も主を信じようと決心し、中学三年生の時に洗礼を受けました。その時、神様と一緒に歩んでいける喜びとともに、主が背後で守ってくださる力強さで心が満たされていたことを覚えています。

大学を卒業後、しばらくして父の経営する半導体やコンピュータ機器の輸入、販売をしている会社に入社しました。ほどなくして米国への駐在を命ぜられました。入出国を繰り返しながらではありましたが、現地での滞在期間はトータルすると約一年半になりました。米国の文化やビジネスマナー、言語やコミュニケーション等、すべてにおいて未熟だった私は、現地の英会話教室に通い言語や習慣を学びました。しかし、なかなか実践では活用できないまま、時間だけが経過していくことでストレスが大きくなっていきました。日常の生活にも疲れ、人とのコミュニケーションが億劫になり、電話回線で全米各地を繋いで行なわれていた礼拝や福音集会の参加も不規則になり、主に救いを求めることも、依り頼むことも、心からの祈りを捧げることもしませんでした。

駐在生活が半年を過ぎた頃、バンクーバーのバイブルキャンプに参加することになりました。ロサンゼルス在住の姉妹の助けを借りて手続きをして、不安な気持ちでバンクーバーへと向かいました。しかし、このキャンプでは想像できないくらいの大きな喜びに満たされました。兄弟たちが語る主のみことばの一つひとつに励まされ、日本から参加した兄弟姉妹、現地の兄弟姉妹との交わりで本当に楽しい時を過ごしました。ロスに戻ってからは生活がガラリと変わりました。主に祈りつつ前に進み、仕事上でも積極的にコミュニケーションをとったり、ロサンゼルスの集会も毎週行くようになり、ご兄姉とも本当に親しく交わっていただき、駐在期間の前半と比べると、後半はとても満ち足りた時間と祝福をいただきました。

帰国してしばらくして後、二〇〇一年に同じ会社で働いていた主にある姉妹（旧姓：澤辺美知）と御代田の西軽井沢国際福音センターで結婚式を挙げることができました。

結婚してから三年が経過しようとしていましたが、私たちには子供が与えられませんでした。いくつかの専門の病院で検査を受けたところ、原因は私にあり、今後妊娠する可能性は限りなく低いということが分かりました。しかもその検査で精巣に腫瘍が見つかったのです。すぐさま大学病院を紹介してもらい精密検査を受けたところ、その腫瘍は「がん」であることが分かり、摘出手術を受けることになりました。手術は無事に終わり、「がん」が初期であったため転

移もなく、術後は投薬等の治療もしないで退院することができました。自分が「がん」であったこと、そして子供が授けていただけないこと、二つの大きなショックでしたが、特に子供の件に関しては非常に残念で悲しいことでした。

妻にとっても深い悲しみであったと思いますが、妻は私に、「子供が与えられていたら、不妊治療をしていなかったので、がんの早期発見はできなかったはず。だから、これは主が私たちに課した試練、というより恵みじゃないですか。むしろ感謝しましょうよ」と言いました。主に感謝する、と言えばそれだけではなく、私の病を通して美知姉妹の実の母、澤辺松美姉妹を救いへと導いてくださいました。私たち夫婦は母の前で言い争いをしてしまうような者でしたので、母からは「二人に信仰があるとは思えない、あなた方の信仰とはなんなのだ」と言われたこともありましたが、主が聖書の中で約束してくださっている家族の救いという素晴らしいみわざをなしてくださったのです。隣れみと恵みとを注いでくださったことに改めて感謝しました。

主は人の子らを、ただ苦しめ悩まそうとは、思っておられない。（哀歌　3・33）

たとい悩みを受けても、主は、その豊かな恵みによって、あわれんでくださる。（哀歌　3・32）

それからしばらくの後、妻が左胸に違和感があると言い、クリニックに行き検査をした結果、乳がんであることが判明いたしました。その結果が分かった時はショックを受けました。

主の御手に委ねて、手術や治療に向き合っていこうと祈っていた矢先、妻は不注意から左足をけがしてしまいました。乳がんの手術を予定している大学病院に救急で検査をしてもらった結果、骨折しているということでした。手術が必要だけど満床だからと帰宅を命ぜられ、紹介された近所の病院では手術をしなくても大丈夫、という別の診断をいただきギプスをして自宅から通院するように言われました。

それから松葉杖の生活が始まりました。不自由な生活の中でのバタバタした状況のゆえに、乳がんの手術に対する不安や心配はかえって軽減されました。骨折はさらなる試練と当初は感じましたが、主は恵みとして備えてくださっていたのだと思いました。

妻は乳がんの手術を無事に終え退院しましたが、その後は抗がん剤の投与という、新たな長い試練が待っていました。大学病院まで通院し、数時間かけて抗がん剤投与をする日々が始まりました。副作用による慢性的なだるさと吐き気、手足のしびれ、ごっそりと抜けてしまう髪の毛等、体の内側と外側の両方のダメージにひどく苦しんでいました。しかし私は、妻が抗がん剤を投与され肉体的、精神的に苦しんでいる時でさえも、その苦しみを十分に理解することができず、いたわることができず、愛のない言動や態度を取ってしまうことがありました。それは私の内面に問題があったのです。

結婚するずっと前から私は、結婚したらこうありたい、という理想の家庭生活像を描いていました。結婚に際しては、その家庭生活像に従った心地よい生活環境を築き上げるために、夫の仕事と妻の仕事を、外で働く仕事と家庭を守る仕事と明確に役割分担し、妻は家庭内の仕事全般をするように主張しました。望むように家庭のことができていないと妻を責め、またあるレベルに達していないと思うときは再度やるよう要求していました。病気で苦しくて動けない妻が目の前にいたとしても、「役割分担」という思いがこの期に及んでも自分を支配していましたし、分担する仕事は「最優先で必ず成し遂げるべきもの」

なら、私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。

（ピリピ　2・1～5）

これは、私たちが結婚指輪に刻んだみことばです。私は、自分には愛も憐れみも自己犠牲も足りないことを認識していましたので、私たちの生活の基礎がこのみことばのようになれればいいな、という思いから選んだのです。しかしそのことを忘れ、時として主とはかけ離れた歩みをしてしまうのでした。しかし、いままでの歩みを振り返るとともに悔い改めの機会

と思いこみ、それが正当性を主張する根拠となりました。人は考え方、思考によって感情が決まり、その感情によって行動が決定されると言われています。行動を変えるためにはその源である考え方を変える必要がありました。しかし私には、「役割分担」という考え方へのこだわりが根強く残っていて、行動を変えることができず、ベッドで苦しんでいる妻さえも動かそうとしてしまいました。

妻は、そのような状況での治療生活でしたので、肉体的な痛みや苦しみ、外見の変化だけでなく、不安感や孤独感、夫へ頼ることができないつらさ、苦しさ、などが増大していき、精神的に不安定になっていました。しかし主は、兄弟姉妹の祈りや助けを備えてくださり、妻を支えてくださいました。

もしキリストにあって励ましがあり、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがある

が与えられました。主に依り頼み、委ね祈りつつ、妻と私の間の中心にいつも主をお迎えして歩んでいきたいと思います。

冒頭に述べましたように、私は両親に救いがもたらされたことがきっかけとなって主を信じるようになりました。父の会社に入社したことによって、親子であり、主にある兄弟姉妹であり、上司と部下であり、三つの関係性が感情と複雑に絡み合い、時として理解し合えないこともありましたが、その根底では主が中心となった関係を保ってきました。その両親が集会から離れて数年が経過しました。

当初、私は集会に来ることにためらいを覚えていました。なるべく目立たぬように来て、ひっそりと帰るようになっていました。このような事態は主に委ねるしかないと思っていても、どのように思われているのだろう、と周りの人の目を意識してしまい、兄弟姉妹にお会いしてもこちらから手を差し出し握手をし

てもよいのだろうか、とためらわれました。

人は心に計画を持つ。主はその舌に答えを下さる。人は自分の行ないがことごとく純粋だと思う。しかし主は人のたましいの値うちをはかられる。あなたのしようとすることを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画はゆるがない。

（箴言　16・1～3）

人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、その人の歩みを確かなものにするのは主である。

（箴言　16・9）

なぜ主がこのようなことを起こされたのか？何をお示しになろうとされているのか？私、は何を問われているのか？私にはまだ分かりません。しかしながら、今までの歩みを通して、主に信頼して委ねた時、

主は最善の時に、最善をなしてくださいましたし、これからもそのようにしてくださると約束してくださっています。

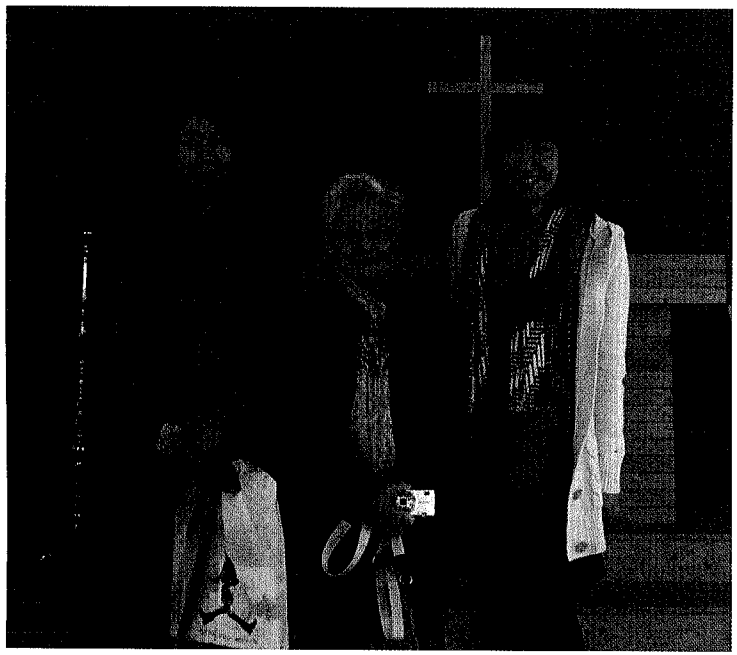
ある福音集会でメッセージを語られた兄弟の口を通してもこのように勇気を与えてくださいました。「主に委ねるとは手を引くことではなく、問題を主の前に出すこと、自ら積極的に一歩前に進むことである」。このように主は語りかけてくださり力をお与えくださいます。

主に委ねることがなかなかできない者、自分を義としやすい者、主を愛しているといいながらもほんの小さな愛しかない者でありますが、主はそんなこともすべてご存じであります。これから、主の御手に明け渡すことができるように祈っていきたいと思います。そして、主からどのよう導いていただけるかを楽しみに待ちたいと思います。

古田知士（ふるたともじ）
一九六九年九月三十日生（昭和四十四年）
八王子市立清水小学校卒業
八王子市立甲ノ原中学校卒業
私立桜美林高等学校卒業
東京経済大学経営学部経営学科卒業
サーヴァンツインターナショナル株式会社　管理担当
執行役員

主は私の羊飼い

古田　美知



右から美知さん、お母さまの松美さん、お姉様の結加さん

私は二人姉妹の二女として東京都武蔵野市に生まれました。姉とは八つ離れており、甘やかされて育ちましたが、父の事業の失敗などさまざまな問題から家庭の中にはいつも争いがありました。

通っていたミッション系の小学校では礼拝があり、私は聖書の神様の存在を素直に信じて家庭が平和になるように祈っていました。また、義理の姉となった古田繭子姉とは小学一年生から同級生であり、中学生のころに、彼女に誘われて友人たちとはじめて吉祥寺キリスト集会に行きました。その後、十六歳のときに父に病が与えられました。父が死んでしまったら家族の平和は永久にないのかと絶望し、父の回復を必死に祈っていたと思います。その祈ったときに私の心は温かいものに包まれたのを今でもはっきり覚えています。

死は終わりではなく、天国が用意されているという聖書のみことばを信じるようになりました。天国

からなかったのです。

そのとき、あなたが呼ぶと、主は答え、あなたが叫ぶと、「わたしはここにいる。」と仰せられる。

（イザヤ　58・9）

そのようなとき、私は真剣に主に祈り求める問題にぶつかりました。主にどうしても自分の思いを成就してほしくて祈り求めました。主はその祈りに答えて、「わたしはここにいる」と、ご自身の存在を明らかにしてくださいました。祈りの結果は求めたものとは正反対でしたが、私は主が答えてくださったという思いで喜びに満ちあふれ、涙が出ました。

自己中心な考えで自分を縛りつけていたことからの解放であり、自分の心を主に明け渡し、心が軽くなりました。それまで主が何度も語りかけてくださっていたにもかかわらず、自分勝手に歩き続けたことへの希望を持ち、病床の中にいる父にも神様に祈ってほしいと伝えることができ、父が召された後は天国が近しい所に感じるようになりました。

しかし、その後は特に聖書を読むこともなく集会にも通わなくなりましたが、社会人になって問題にぶつかると、時々ですが再び集会に通うようになりました。また誘われて御代田で行われるバイブルキャンプにも参加しました。そこで話される主イエス様の話にはいつも愛を感じ心が癒されましたが、信仰によって自由が奪われるのではという思いが強く、自分勝手な道を進み続けていました。

一九九七年に転職をしましたが、そこでは主イエス様を信じている兄弟姉妹が多く働いており、同僚やまた集会の友人が楽しそうに主イエス様の話をし、主を信頼して喜んでいる姿を見ました。

私はその喜びがほしいと思いました。私は神様の存在は信じていても、自分との関係性がはっきりわ

を悔い改めました。このときの喜びは、後にどんなことがあろうとも、主が生きて働かれるという確信の根拠となりました。

その後、私は二〇〇一年五月に同僚であった古田知士兄と結婚に導かれました。知士兄は古田繭子姉妹の義弟です。主のご計画は不思議で恵みに満ちています。今、繭子姉妹とは共通の友人のことを祈り、また家族の問題を共有して祈れる恵みを感謝しています。

結婚後しばらくしても、私たち夫婦には子供が与えられませんでした。そのために検査を受けたところ、その中で主人に癌が見つかりました。子供がほしいという強い思いで祈りながら進めていた検査・治療でしたが、主ははっきりとその道を閉ざされました。

私たちは、現代の医療に頼ることが主の御心に反しているのではないか、と不安を持っていました。もし御心でないならわかりやすく教えてくださいと祈っていました。しかし、主の回答は予想をはるかに超えたものでした。私は、主人は召されてしまうかもしれない、子供も与えられない、私はすべて取られてしまう、どん底に落ちてしまう、と必死に心の平安を祈りました。祈りさえすれば暗闇から抜け出させていただけると信じていたのですが、私の中の暗闇には光が一点も見いだせず、暗い底にどんどん落ちていき、大変な恐怖を感じました。

なぜ信仰があるのに平安がないのかという思いが強く、眠れませんでした。自分では主に必死に祈っていたつもりでしたが、私は自分の手で問題を握りしめていて、主が問題を受け取ってくれようとしても明け渡すことができなかったのだと思います。

しかし、義母は息子の病気を聞いても動揺することなく、とても平安でした。その義母の姿を見て、主に近づくとはこのような態度なのではないかと思わされました。試練は主に近づくためであり、主に近づ

けばどんな問題があっても主からの平安がある、私も主に近づきたいと祈りました。その夜、私は驚くことにその暗闇から解放されました。

主は、ご自分の羽で、あなたをおおわれる。あなたは、その翼の下に身を避ける。主の真実は、大盾であり、とりでである。あなたは夜の恐怖も恐れず、昼に飛び来る矢も恐れない。

（詩篇　91・4〜5）

主人は私以上に辛く苦しかったと思いますが、手術も無事に終わり二人で平安に祈ることができました。主が私たちには十分な恵みを与えてくださっていると思えました。

またそのとき、主は私の母にも光を当ててくださり、母を救いへと導いてくださいました。今、母は病の中で厳しい道を歩まされていますが、主は白髪になった母を背負ってくださり、いつも慰めてくださっています。

二〇一一年九月に私に乳癌が見つかりました。不安にはなりましたが、この病気は主からのものだと受け取ることができました。しかし癌と診断された一週間後に自分の不注意で右足を骨折してしまいました。松葉杖での不自由な生活が始まり、主人をはじめ義姉や多くの人に大変な苦労をかけてしまいました。しかし、これは手術までの間に色々と考え過ぎてしまうような私の性質をよく知っている主が与えてくださった恵みだったと思います。仕事を休み、家での治療期間が与えられ、友人、兄弟姉妹がお見舞いにきてくださり、家庭集会にも連れていっていただきました。多くの方に支えていただいて、祈っていただき本当に感謝でした。

十一月末には足のギブスも外れて乳癌の手術も無事に終わりました。しかし術後の検査結果で抗癌剤の追加治療が必要となりました。他に方法はないのかと模索（もさく）しましたが、主に委ねれば、どのような道を進むことになっても主が責任をとってくださると思い、強い安堵（あんど）感で二〇一二年一月より抗癌剤治療をスタートすることができました。

しかし治療の副作用で髪の毛が抜けたり、手足のしびれに苦しんだり、治療を順調に進めることができなかったりして、私のストレスは次第にたまっていきました。また自分の命のことを考えるようにもなりました。主人に八つ当たりをし、病気を理由にわがままを言い、また自己憐憫（れんびん）に陥ることもありました。父や友人、信仰の先輩方がいる天国はどんなに素晴らしいところだろうと考え、なぜ自分の命のためにこんな治療をしているのだろうという思いにもされました。

あなたがたのうちのだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。しかし、きょうは野にあって、あすは炉に投げ込まれる草をさえ、神はこのように装ってくださるのです。ましてあなたがたには、どんなによくしてくださることでしょう。ああ、信仰の薄い人たち。

（ルカ　12・25、28）

それでも主人の病気のときに感じた真っ暗な闇の中に入ることはなく、聖書のみことばによって日々慰められ、治療中は主の御手の中で優しく包まれ安心して休むときを過ごせました。試練の中にいる間は、特別に主の愛を感じるときだと思わされました。

主は羊飼いのように、その群れを飼い、御腕に子羊を引き寄せ、ふところに抱き、乳を飲ませる羊を優しく導く。

（イザヤ　40・11）

もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。

（ローマ　14・8）

思いのほか長くかかった通院生活が終了した後に、私は急に不安となりました。周囲からは治療が終わり良かったと言ってくださいましたが、再発の不安がよぎり体の不調に敏感になりました。また専念していた治療が終わり、何かしなければいけないのではないかと気持ちが焦りました。友人たちは子育て、仕事、奉仕に元気で忙しくしているのに、私は十歳も二十歳も年をとってしまったような感覚に陥り、周りの世界が輝いて見え、羨ましく、孤独感を感じ落ち込みました。自分の存在価値を考え、また夫婦のあり方についても悩みました。夫婦は子育ての苦労と共に成長があるのではないか、私たちには成長はあるのか、私たちは家族といえるのか、ただの共同生活者になっていないか、と。主人は私の代わりに家事を負担し、病気を理由にわがまま放題な私にストレスを感じ、疲れが溜まっていたと思います。私は一方的に自分が愛されたいと思い、なぜ自分のことをわかってくれないのかと相手を攻め喧嘩となりました。治療の副作用で鬱（うつ）傾向だったのかも知れませんが、何度も自己憐憫に陥りました。

主の牧場で羊飼い（＝主イエス様）だけを見ていた羊（＝私）が、外の世界に目を向けると楽しそうに見え、ふらふらと羊飼いから目をはずして森の中に迷い込んでしまい、戻る道がわからなくなったようでした。

あなたがたはわたしの羊、わたしの牧場の羊である。あなたがたは人で、わたしはあなたがたの神である。

（エゼキエル　34・31）

そのころ、私たちは大きな試練の中で、夫婦が心を合わせて祈ることの責任を強く感じていました。それなのに、自分の感情に振り回されていた私は、主人との一致した祈りができなくなり、また兄弟姉妹との交わりを避けるようになりました。自分の信仰の惨めさを見せつけられて、集会に行っても居場所がないように感じました。問題を主から受け取ることが完全にはできず、なぜ、どうしてという思いが強くありました。主の御心がどこにあるのかをいつも尋ね求めていましたが自分の感情や考えに振り回されてしまいました。私は自分のことばかり考え、愛のない者でした。

私たちは、互いに愛し合いましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。

（1ヨハネ　4・7～8）

徐々にではありますが、親しい兄弟姉妹との交わりや、聖書のみことば、友人たちからの慰めにより、迷いから回復していきました。羊飼いである主は、迷っている羊である私をずっと呼び続けてくださっていました。私は主から目を離していたことを悔い改めることができました。静かに温かく私たちのことを祈り見守ってくださった兄弟姉妹に本当に感謝しています。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。

（詩篇　23・1～4）

私は主の羊であり、主が私をご自分の牧場においてくださっている、それで十分でした。私たちにはこれからどのような道が用意されているかはわかりませんが、これからも主の御心を祈り求めていきたいと思っています。

二〇一三年一月一日には義兄（私の姉の夫）が事故で急に召されました。主のなさることは本当にわかりません。今はなぜ、どうしてと問うてしまいますが、残された家族が天国で再び会えるという主の約束を知ってほしいと思っております。

天国はどんなにすばらしいところかと想像し、心がわくわくします。いつかその天国でみんなと会えること、イエス様に直接会える日を楽しみにしています。

古田美知（ふるたみち）
一九六八年　東京都武蔵野市生まれ
立教女学院小・中・高卒
日本大学理工学部卒
（株）東芝からサーヴァンツインターナショナル（株）に転職、その後二〇〇一年に退職
夫：知士　母：澤辺松美

主を仰ぎ生きる者へと変えてくださったイエス様

岩田 勇



中央が勇さん、みなさんと

私は、一九九八年十月、不治の病といわれるアルコール依存症と診断され、精神専門病院に入院を余儀なくされました。しかし、このことを通してイエス様のもとに導かれました。

この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。（ヨハネ　11・4）

私は、一九四一年京都で生まれました。五人兄弟の末っ子として高校時代まで京都で過ごしました。高校卒業後は、上京し、大学へ進学しました。

私は、親戚に世話になることになったのですが、格式高く、厳格で、クリスチャンファミリーでしたので、日々の生活のギャップが大きく、私の学生生活は、戸惑い、窮屈でした。三学年になったある日曜日、叔父に連れられ、瀬田にあるカソリック教会を訪問し、同

世代の学生七～八人の交わりの輪に入れられました。

それ以降、毎週の日曜礼拝、若者を対象とした聖書勉強会に義務的に集い、一年後、神父から洗礼の話がありました。よく解らないまま、叔父に投げかけましたが、結論は、「お前自身が決めることだ」ということでした。仲間が全員受洗するものですから、「蚊帳の外」になることをきらい滴礼を受けましました。

大学を卒業して愛知県の自動車関連企業に就職し、新しい人生のスタートを切りました。会社の独身寮の近くにはカソリック教会はなく、イエス様不在の独身生活となりました。

そのうち同僚が結婚し始め、徐々に結婚願望が強くなってきたのですが、なぜか自分の心の中に、相手はクリスチャンでなければという強い思いがありました。不思議です。そして同僚の奥さんに紹介されたのが当時大阪在住のクリスチャンの嘉子さんでした。

二十六歳の時、嘉子さんと結婚することになり、彼女の教会で式をあげました。式には、東京の親戚、受洗した当時の仲間が証人として出席してくれたことは嬉しく、忘れたことはありません。

結婚生活が始まり暫くして教会に集い始めましたが、いくつかの事情があって行かなくなってしまいました。それから定年退職するまでの三十六年間、主から離れ、この世の「喜怒哀楽」を味わいました。この間に、男子二人を授かりました。

入社以来、約三十五年間、営業業務にたずさわったのですが、右肩上がりのモータリゼーションの波に乗り、企業戦士として、売り上げ拡大を目指し、一心不乱に走り続けました。

四十一歳の時、東京事務所営業担当の辞令がおり、家族と共に上京し横浜市に住むことになりました。与えられた課題は、関東地区での「大手得意先の開拓」で、任期は五年でした。関東圏は中部圏と違い、

当時は日産自動車の牙城です。大変でした。二年間は、キーマンの探索から人間関係構築のために連日連夜の営業活動で、不規則な毎日が続き、ストレスの中、酒量が自ずと増えていきました。このころからでしょうか、自分の意志ではなく、体がアルコールを要求し始めたように思われます。

このような状況がその後も続きましたが、与えられた課題にも成果があり、私の心は凱旋気分で愛知の本社にもどりました。時期は、子供たちの進学の時期とかさなり、家族を横浜に残し、単身で本社赴任となりました。

一九八〇年代は、大手の企業では社内ベンチャーが流行りとなっており、当社もそれにもれず、非自動車部門の新しい事業部が設立され、営業責任者としての辞令が下されました。愕然となりました。心の内にあったのは、本社の花形部門の要職を期待していたのです。高慢で謙虚さがまったくありませんでした。

だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。おのおの自分の行ないをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。

（ガラテヤ　6・3～4）

与えられた新規事業部門の業務は未知の世界で、暗中模索の時期がしばらく続き、仕事にも日々の生活にも疲れ果て、特に食生活が不規則となり、酒量が増え、アルコール依存症への坂道を転がるように落ちていきました。この時期、初めて幻聴・幻覚を経験します。ただ事ではないと思いました。

会社も休みがちで、横浜の妻に数度ＳＯＳを発信しました。三年後に妻が横浜から戻り、私も少し心

身安定し、少し平安な状態が続きました。その後、出張先での交通事故による入院、五十二歳から始めたバイクツーリングでの事故による入院、そして無茶な飲酒による肝炎で、身体はぼろぼろになり、一九九八年、精神専門病院に入院しました。

通常四か月の入院期間を、強引に三か月で退院し、元気な身体で復職したのですが、「私の席」はありませんでした。そして、新しい職場配置の一週間後、入院以前から計画していたニュージーランドでのバイクツーリングに強引に出かけ、現地では、何事もなかったかのように飲酒となりました。いわゆる、「スリップ」です。入院は、私には何の役にも立ちませんでした。

こうして、依存症が進み、ある時から、連続飲酒状態になりました。飲み始めると自分の意志では止められない、身体が酒を求めるのです。どのような手段を持ってでも酒を手にしようと必死になります。目が覚めたら、酒を求めさまよい歩きます。妻は、私が隠し持っている酒を見つけては、流す、酒を買えないように双方のお金を隠す、車のキーを隠す、ありとあらゆることをし、私を監視し、そして酒を止め、食事がとれるようになったら、会社に送り出す、また、飲み始めて会社を休む、五十代後半は、この繰り返しでした。このころ妻は、必死に私を支えてくれたと思います。

定年間際に与えられた職場は、地域社会に密着した企業ボランティア活動の推進部署で、地域ボランティア団体とのジョイントでＮＰＯ法人在宅介護センターを立ち上げました。仕事は順調で、何事もうまくいき、会社に出ている時は、酒ともうまく付き合えているとも思っていました。

調子のいい時、高慢になっている時ほど、サタンが忍び込んでくると、後にある兄弟から聞くのですが、センターのマネージメントを数人の女性スタッフの協力

を得て進めるうちに、有ってはならない女性との関係が始まりました。

このことを、酩酊状態で妻に告白しましたが、罪の意識はなく、妻をどん底に落としてしまいました。

妻に告白後、不思議なことが起こり始めました。まず、二〇〇二年二月、妻は、昔の名古屋の友人で吉祥寺集会に集っておられる姉妹から誘われ、豊橋キャンプに参加しました。それから大洗・大阪キャンプへと次々と導かれ、なんと、私の連続飲酒中にドイツキャンプに参加したのです。

また、ひそかに聖書を読み始め、真剣に祈っている姿を見たとき、得体のしれない恐怖を感じました。その後、妻は名古屋集会に集うようになり、「光よあれ」やメサイヤのＣＤを持ち帰り、私に聞かせるのですが、気分がいいのです。また、後日、曲ではなくメッセージを聞いていて、この人に会いたいと妻に求めました。

二〇〇二年六月、富山キャンプに導かれ、まったくの「しらふ」でベックさんにお会いし、お交わりいただきました。ベックさんは、「集会は宗教ではないよ。純粋に聖書のみことばに立ち、神様だけを中心とする交わりを大切にする人々の集いです」と話してくださいました。解りやすく、納得できました。そして、「八月には御代田キャンプがあるよ。来年はドイツキャンプがあるから、いらっしゃい」と誘ってくださいました。

この日のことは、すべて鮮明に覚えています。この夜、深夜まで、多くの兄弟方の交わりの輪に入れていただき、素直にありのままの姿を露呈できました。何なんでしょう…それまでに味わったことのない心の安らぎを覚えたのです。大変気分を良くして、帰りました。しかし、帰宅後、連続飲酒が始まり、定年退職後に残されたＮＰＯ嘱託業務も対応できなくなり、二〇〇二年六月、波乱万丈なサラリーマン生活

にピリオドを打ちました。そして、新たな歩みの一歩が与えられました。

二〇〇二年八月の御代田キャンプに初めて導かれました。妻は、集会の兄弟に励まされ、連続飲酒状態のため酔っ払っている私に缶ビールを持たせ、名古屋からの長い道のりを電車で御代田に連れて来てくれました。ベックさんとのお交わりの約束もあったようですが、とてもそのような状態ではありません。センターに滞在中、酒を求めてさまよい歩きました。お金がなくなると、キャンプに集っておられた見知らぬ兄弟にお金を借り、またまた、酒を求め歩きました。それまでは、このような姿を第三者には見せなかったのですが、すべてが明るみに出てしまいました。こうして、全国の兄弟姉妹が祈ってくださることとなりました。

帰宅後も酒を飲み続け、お酒だけで生きている状態で、かつてない激しい幻覚・幻聴が始まり、入院を妻に訴えました。病院に着くと妙に意識が高揚し、自ら勇んで回復室に入り鍵が下ろされました。ほんの数秒して、「こんな所にいると死んじゃう」という強い思いが頭をよぎり、大声で「出してくれ」と叫び続けました。本来、回復室に入った患者は自分の意志では出られないのですが、どういうわけか退室と退院が許可されたのです。不思議です。

愚か者は、自分のそむきの道のため、また、その咎のために悩んだ。彼らのたましいは、あらゆる食物を忌みきらい、彼らは死の門にまで着いていた。この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救われた。

（詩篇　107・17〜19）

妻はこの時、これからどうすればいいのかと思い、絶望で泣き崩れたようです。しかし、「彼に信頼する者は、決して失望させられることがない」（1ペテロ2・6）のみことばを思い出したそうです。退院した夜、名古屋に住んでいる次男が来て、一睡もせず、無言で翌日の昼まで見守ってくれました。

二〇〇二年八月十六日、飲み続けたお酒が止まったのです。地獄の日々が去り、症状が徐々に和らぐ中で、意識も回復し感謝の涙が流れました。平安な空気が漂いました。その時から十三年たった今まで、お酒を一滴も口にしていません。飲みたいという気持ちもまったくありません。そして、何よりも身体が酒を求めないのです。本当に主が守り、一方的に取り上げてくださったと、確信しています。

ベックさんは、「奇跡だよ」と言ってくださいました。神の御業としか思えません。この時、私は、神は絶対おられると、理屈抜きに確信しました。

10人の証し

Unser HERR lebt

わたし、このわたしは、わたし自身のためにあなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない。

（イザヤ　43・25）

次の日曜日から妻と一緒に集会に集い始め、二〇〇二年十一月二日、御代田で妻と共に洗礼を受けました。おおよそ四十年もの間、自分勝手な歩みをしてしまった者をも、主は大きなご愛と憐れみをもって、再び光の中へ戻してくださったのです。そして、主を仰ぎ生きる者へと変えてくださいました。

しかし私は絶えずあなたとともにいました。あなたは私の右の手をしっかりつかまえられました。

（詩篇　73・23）

定年退職後は、国内外のキャンプに積極的に参加しました。多くの兄弟姉妹との交わりの機会をいただきました。ある時、御代田キャンプで、いつも楽し

く交わっていただく兄弟から、「病気のデパートが来たよ」と、紹介されるぐらいに、大腸・食道・肺癌等々の試練が与えられましたが、いずれも早期の発見で、元気で、生かされています。主は、「日々の光」を嘉子姉妹と共に読み、祈る恵みを与えてくださっています。感謝です。

私は心を尽くして主に感謝します。あなたの奇しいわざを余すことなく語り告げます。私は、あなたを喜び、誇ります。いと高き方よ。あなたの御名をほめ歌います。（詩篇　9・1〜2）

岩田　勇
一九四一年九月　京都市東山区生まれ
市立桂小学校、市立上桂中学校、府立桂高等学校、青山学院大学卒業
アイシン精機株式会社　定年退職

妻：嘉子（ヨシコ）
長男：亮（リョウ）、嫁：恵（メグミ）、
孫：零生（レオ）・芽生（メイ）
次男：浩（ユタカ）、嫁：彰子（アキコ）

主のあわれみは尽きない

岩田　嘉子



夫の勇さんと

私は一九四一年大阪に生まれ、クリスチャンだった母の勧めで、小学生のころから毎週、教会の日曜学校に行っていました。中学、高校は、母が卒業したキリスト教系の学校に進学しました。

日曜日は教会で、学校のある日は学校の礼拝で、ずっとイエス様のことを聞いて成長し、二十歳の時にイエス様を信じて、教会で受洗しました。将来、結婚するならクリスチャン、と心に決めていました。二十五歳の時、友人からカトリック信者を紹介され、いろいろ問題はありましたが、私が行っていた教会で結婚式を挙げました。二十六歳の時でした。

結婚を機に、生まれ育った大阪を離れ、愛知県に住むようになりました。交通の便が悪かったことや、他のいろいろな理由もあって、結局、私も主人も教会へは行かなくなりました。それから三十四年間、主から離れ、自分の思うままに生きてきました。そうでありながら、今は教会に行っていないけれど、私は

クリスチャンだと思っていました。

あなたはわたしに忘れられることがない。わたしは、あなたのそむきの罪を雲のように、あなたの罪をかすみのようにぬぐい去った。わたしに帰れ。わたしは、あなたを贖ったからだ。

（イザヤ　44・21～22）

主は、私の高慢で頑なな心を砕き、主の前にへり下ることができるようにと、ご計画をもって試練を通されました。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――――主の御告げ。――――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。

（エレミヤ　29・11）

主人は五十歳のころにアルコール依存症になり、六十歳の定年退職のころにはかなり進んでいました。

第二の職に就きましたが、たびたび連続飲酒の状態になって仕事に行けなくなりました。治らないばかりか、年々ひどくなっていく病は私の悩みとなり、心に重くのしかかりました。けれども少しずつ対応の仕方に慣れていった私は、自分の力で切り抜けることができると思うようになりました。

ところがある時、酔った勢いで、付き合っている女性がいることを主人から聞かされ、すごい衝撃を受け、どん底に突き落とされたようでした。自分ではどうしようもなく涙を流すしかありませんでした。そのような時、集会の姉妹から電話があり、すべてを聞いてもらって、イエス様のところに行くしかないと思わされました。

二〇〇二年の名古屋キャンプの時、誘われて豊橋へ出かけました。礼拝の中で、賛美を聞いているうちに、

主イエス様にごめんなさいという気持ちと、自分勝手に生きてきたことを悔いる思いとが一緒になって、涙が込み上げてきました。

初めてのベック兄とのお交わりの間、私は何も話せず泣いているだけでした。それから大洗キャンプ、大阪キャンプに導かれました。誘ってくだされば、どこにでも行きたいと思いました。

ドイツキャンプはキャンセル待ちでしたが、参加できることになりました。ドイツへ出発する日から、主人はまた連続飲酒が始まり、仕事に行けなくなりましたが、主人のことは主にお委ねして出発しました。

ドイツでは、苦しい現実から離れることができ、美しい景色と心地よい環境の中でお交わりに恵まれ、たくさんのみことばに触れ、「日々の歌」を賛美するうちに、少しずつ心が軽くなっていきました。大変な状況の中、ドイツまで行けたことは私にとって本当に感謝なことでした。ドイツでは毎朝晩、同室の姉妹方との祈り会で祈ることができ、帰宅してからも一生懸命祈り続けました。

状況は何も変わりませんでしたが、主人の上にいろいろ変化が見られるようになりました。主人に主が働いてくださっているのだと思いました。

名古屋集会に初めて集った時に頂いたＣＤを聴いていた主人が、曲ではなく、最初のメッセージのところを聞きたいと言い出し、聞いているうちに、この人に会いたいと言ったのです。何日もお酒が止まらず酔い続けていたのに、いったい何を感じたのか、不思議でした。主のお働きに、ただ感謝するばかりです。

そういうことがあって、主人は富山キャンプに導かれ、ベック兄と初めてお交わりさせて頂きました。ちょうど富山キャンプに合わせるようにお酒が止められ、素面で参加することができました。兄弟方とのお交わりも与えられました。ベック兄から、八月は御代田

キャンプ、来年にはドイツキャンプもあるよと言ってくださり、喜んで帰ってきました。でも、私には主人がドイツキャンプに行けるとは到底考えられませんでした。絶対ありえないと思いました。その後も、だんだん仕事に行ける日が少なくなって、手に負えなくなっていきました。

八月の御代田キャンプに素面で行けるようにと願っていましたが、とうとうお酒は止められず、キャンプに行くのをやめようかと思いました。しかし、ある兄弟が「そういう時こそ連れてきてください。そういう姿を見れば、皆が祈ってくれますから」、と言ってくださいました。その言葉に励まされ、酔っている主人を連れて電車で御代田に向かいました。ただ連れて行かなければという思いで必死でした。

やっとの思いでセンターに着きましたが、十日以上お酒が切れていないので、靴も履かずに外へ出てセンターの周りを徘徊するなど異常な状態でした。でも、アルコール依存症だった兄弟たちが、主人とお交わりしてくださったそうです。また、泊めてくださったご兄姉や一緒に泊まってくださったご兄姉が、酔っ払いの主人を交わりの中に入れてくださり、とても良くしてくださいました。

何があるのかも分からず、ただ連れていかなければとの思いだけで必死になって辿り着いた御代田でしたが、そこにはあらゆるところに主の備えがあり、主の恵み、主のご愛がありました。御代田に行けたことは本当に感謝でした。

帰宅してからさらに一週間、飲みたくないと言いながらも、飲み続けていました。頭がもうろうとしながらも、「大きな罪を犯してしまった」と言っているのを二、三度聞き、主人も苦しんでいるのだと気付かされ、主人が哀れで、かわいそうに思えてきました。それまでは、自分のことばかり祈ってきた私でしたが、主人のために祈るようになりました。

私が頑張ればお酒を止めさせられると思っていましたが、もう止めることができなくなり、困り果て、とうとう主の前に降参し、「私にはもうどうすることもできません。主人を助けてください」、と泣きながら祈りました。主人の状態はますます悪化し、幻覚の中で壁に向かって見えない人と大きな声で喋ったり、夜はベッドの上でドタバタ寝返りばかり打つので、怖くなり、早く病院に入院してほしいと思いました。

やっとその気になった主人を病院に連れていったのですが、飲酒で入院する人が最初に収容される回復室に入ったとたんに、「出してくれ」と大声で叫び続けていました。先生の指示があるまで私は広い部屋で一人待たされましたが、呼ばれるまでずっと入院できることを願って祈りました。ところが呼ばれて行ってみると、主人は回復室から出され、先生の前に立っていました。先生は「本人が出たいと言っているので、ここでは受け入れられません」と言うばかりで、こちらが何を言っても聞いてもらえず、帰されることになりました。

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。

（イザヤ　55・8）

私は、この人を連れて帰ってこれからどうすればいいのかと思い、絶望して泣き崩れました。ところが帰りのタクシーの中で、「彼に信頼する者は、決して失望させられることがない」（1ペテロ　2・6）のみことばが頭に浮かびました。その日の夕方、次男が仕事帰りに寄ってくれ、翌日の昼ころまで主人の様子を見てくれました。その間に二十日間飲み続けたお酒がやっと止まりました。嵐のような日々が去って、平安な空気が漂いました。わざわいではなく、平安を与

える計画である、と主が仰るとおりでした。

二〇〇二年八月十六日から、十二年半ほどになりますが、主人は完全にお酒から解放されました。あの時、病院にどうして入院できなかったのか、その時は意味が分かりませんでしたが、すべては主の御計らいであった、と後になって分かりました。

わたしがしていることは、今はあなたにはわからないが、あとでわかるようになります。

（ヨハネ　13・7）

主は、主に逆らう愚かな私たちを救いだし、再び主の囲いの中に戻してくださったことを心から感謝しています。滴礼を洗礼と受け止めていた私たちでしたが、二〇〇二年十一月、洗礼の恵みにあずかりました。主人の洗礼の時、兄弟が引用してくださった次のみことばは、私たちにくださったものと、今でも大切に思っています。

愚か者は、自分のそむきの道のため、また、その咎のために悩んだ。彼らのたましいは、あらゆる食物を忌みきらい、彼らは死の門にまで着いていた。この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から救われた。主はみことばを送って彼らをいやし、その滅びの穴から彼らを助け出された。彼らは、主の恵みと、人の子らへの奇しいわざを主に感謝せよ。彼らは、感謝のいけにえをささげ、喜び叫びながら主のみわざを語れ。

（詩篇　107・17〜22）

その後、地方の喜びの集いにも参加する機会が与えられ、主を喜ぶ者にしてくださいました。二〇〇三年には「ドイツ喜びの集い」に夫婦で参加することができました。こんなことは絶対ありえないと思っていました。

これまで日本で多くの方々が私たちのために祈ってくださっていたことは聞かされていて、感謝していましたが、ドイツでも祈ってくださっていたことを知って、私たちが今あるのは、主にある兄弟姉妹方のお祈りのおかげであった、と心から感謝しました。

かつては、主人も私も別々にそれぞれの興味に明け暮れていましたが、今は、それらをすべて止め、毎週集会に集い、一緒に聖書を読み、祈る者へと、主が変えてくださいました。私は長くコーラスを続けていましたが、もういいという気持ちになり、今は、賛美で主に感謝したという思いをいただいています。

家族の救いは主のお約束ですので、主人と毎日、そのことを感謝して祈っていました。二〇一一年十一月、長男「亮」からウツになったと電話がありました。一か月ほど我が家で過ごすことになりましたが、その間に、以前から予定していた御代田キャンプに息子を連れていきました。

息子は、どこへ行くのか、何があるのか、何も分からずついてきましたが、時々不機嫌になることもありました。でも、何人もの兄弟方が交わってくださり、本当に感謝でした。いろんなことを言ってくださった中で、「とにかく祈りなさい」という言葉が一番心に残ったようで、家に帰ってからよく祈るようになりました。病を通して主と出会い、お約束の通り、信じる者にしてくださいました。

東京の自宅に帰ってからも毎日、「日々の光」を読み、祈っていたそうです。小学生だった二人の孫たちも父親にならって、祈り始めたそうです。息子はその後、元気になり、復職しましたが、仕事柄、土日の仕事が多く、礼拝、家庭集会には、あまり行けないようです。あんなに喜んでいたのですが。主はすべてご存知ですから、お委ねしています。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

（詩篇　103・1～2）

岩田　嘉子

一九四一年大阪生まれ

大阪学芸大学附属池田小学校、梅花学園中学・高校、梅花女子短期大学卒

夫：勇（いさむ）、長男：亮（りょう）、嫁：恵（めぐみ）、孫：零生（れお）、芽生（めい）

次男：浩（ゆたか）、嫁：彰子（あきこ）

石の心を取り去られて

佐藤　亮



右端が亮さん、左端が妻の多津子さん、みなさんと

事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。

（ヨハネ6・40）

私はカナダのトロントに住み、海外在住者のための電話礼拝に参加しています。また、インターネットで中継される集会を見ながら、主のみことばに触れることを楽しみにしています。

二〇一四年四月の学び会でのベック兄のメッセージの中に、次のような言葉がありました。「私たちはいったい、何に目を留めているのでしょうか。自分を見たり、他人を見たりすることは、劣等感や卑屈な気持ちをもたらしたり、反対に優越感や傲慢な気持ちをもたらしたりするものです」

この言葉に、私はドキリとさせられました。主を知る前の自分の心の状態そのままだったからです。救われるまでの私は、認められたいという気持ちが常に心

の底にあり、また、いつも人と自分を比べては、羨んだり、蔑んだりしていました。

初めてみことばに出会ったのは、一九九三年、妻、多津子との結婚がきっかけでした。妻の両親の希望で、吉祥寺の旧会堂にてベック兄の司式で小さな結婚式を挙げていただきました。

そのときベック兄が、ちょっとした合間に言われたことが、はっきりと記憶に残っています。ベック兄は、「僕は病気で、死にそうなほど苦しんでいる人に会うのが大好き。神様を心から受け入れる用意ができている、そんな人に会えるのがうれしく仕方ないんだよ」、と言われました。私の両親はひっくり返りそうになっていましたが、私は、心の底から神様を信じている人はこんな風に思うものかと、強い感銘を受けました。しかし、このときはそれだけでした。

結婚後の私たちは、この世的には何ひとつ不自由のない生活をしていました。しかし、三十代半ばに近づくにつれ、心の中に黒い空洞が広がっていくのを覚えるようになりました。第一に、それまで打ち込んでいた仕事に興味を失い、色褪せたものに見えてきたのです。また、自分たちには子供ができる可能性がないことがわかりました。

熱意はなくしていても仕事は忙しく、最終電車で帰宅する日々でした。ある夜、電車の中でこんな思いが胸に去来しました。「自分の人生のよい時期は、何ひとつ価値あるものを生まないうちに終わってしまった。これからは毎日、意味もない仕事をしながら、歳を取っていくのだ。子供もできず、いずれは骨になって、地上から消えるだけ・・・この世はなんと暗くて、つまらないところだろう」

自分のことしか考えられなかった私は、そんな気持ちで毎日を送っていました。私の様子を聞いた義母は、福音センターや家庭集会に誘ってくれましたが、メッセージは無味乾燥で、心を動かされることはありませんでした。また、他の人たちが、お互いを兄弟・姉妹と呼び合っていることに強い違和感がありました。

その頃に主を受け入れていれば、まったく違う人生だったかもしれません。しかし、このときの自分の心は、ふたの閉じた瓶のようなもので、水の中に浸しても、上からどれだけ浴びせても、一滴も中に入らない状態でした。

人生の閉塞感を打ち破るために、日本を飛び出してカナダに移住することを考えました。学生時代から外国旅行が好きで、米国駐在もしていた私は、海外での生活に憧れを感じていたのです。ドイツへの留学経験があった妻もこの考えには進んで賛成してくれました。

カナダ移民局に申請を出すと、一年後に永住許可を認められ、二〇〇〇年の秋、二人でトロントに移り住みました。既に三〇代半ばに差し掛かっていたのに、安定した日本での生活と仕事を捨て、後先も考えずに外国の街に飛び出すのは、振り返ってみますと冷や汗が出るほど無謀なことでした。両親にも反対されましたが、私自身は、怖いとか、失敗したらどうしようとかいう不安は、不思議なほどありませんでした。このとき、イエス様の方を見ようとしなかった私を導くための、主の大きな計画の中にいたことが、今ははっきり分かります。

トロントに家を構えて二ヶ月もしないうちに、カナダのＩＴ企業に採用されました。世界各地から集まった移民がそれぞれの文化を守りながら調和を保っているカナダ社会は、「人種のるつぼ」ではなく、「人種のサラダ・バー」と呼ばれることがあります。私が奉職した会社もメンバーの半分以上が外国生まれでした。仕事もやりがいを感じられるもので、世界から集まった優秀な開発者とともに働けることに大きな誇りを感じ、カナダに移り住んだのは正しい選択だっ

たと心から思いました。

日本からはときどき集会の出版物やメッセージのテープが送られてきました。また、当時トロントにおられた兄姉に誘われて礼拝に参加したこともありましたが、自分にとって少しも意味のあることとは思えませんでした。

異国の街にも順調に定着し、夢だったハイテク企業の仕事に就いて、すべて自分の能力と決断で理想どおりの生活を手に入れたと信じていましたが、この傲慢は打ち砕かれるときがきました。働き始めて数年間が経ったある日、上司の部屋に呼び出され、「組織替えになったのであなたの役職は今日でなくなります」と、突然、解雇を言い渡されたのです。IT系、中でもソフトウェア開発の職場では、会社の技術が外に持ち出されることを防ぐため、このようなやり方をします。話には聞いていましたが、自分の席に戻ることも許されずに外につまみ出されたときは、言いようもないほど惨めな気持ちでした。しかも、この後、十ヶ月に渡って仕事が見つからず、求人に応募しても返事をもらえない日が続いて、社会から隔絶されたように感じました。これは、間違いなく、私を砕くために主の計画されたことでした。

この時期の私は、人に羨望の眼差しを向けて、「あのとき、ああしていれば・・・・」と過去を後悔したかと思えば、自分も悲惨な状態にいる中で見下す相手を探しては、「あんなふうにはなりたくない」と尊大な気持ちになることもありました。

冒頭のベック兄の言葉はこう続きます。「そのような状態にある人をイエス様は、祝福することができない。自分自身を見たり、他人を見たり、周囲を見たりしないで、ただ高く引き上げられたイエス様だけを見上げることが、主と同じ姿に変えられて行く秘訣です」

その当時の私は、主を見上げる気持ちは微塵もなく、人に対する卑屈さと傲慢さの間を行き来しているだけでしたが、この世の価値観だけに捉えられて生きることの虚しさを次第に覚え始め、人以外に見るものがない人生はどこまで行ってもみじめなものだと、漠然と考えるようになりました。

そして、ほこりをかぶっていた「光よあれ」を開いてみると、人生の目的を見失った体験を通して主に近づいた人の証しの中に、自分との接点があるような気がし始めたのです。この十ヶ月間の経験を通して、目には見えない、次元の違う高さにいる何かを求める気持ちが生まれたのは主の憐れみでした。

そんな中、二〇〇九年のバンクーバーの集いに参加したことが、本当の意味で主を信じる転機となりました。ベック兄姉は私たちのことを覚えておられて、十六年前と同じ温かい握手をしてくださいました。このときの集いを機に、正面から主を見上げることになったのですが、それには大きく二つのきっかけがあったと思います。

ひとつは、ホテルの一室で持たれた交わりで示されたみことばの中にありました。その頃までに私は新しい仕事に就き、再びカナダでの生活の基盤を確立していましたが、同僚との間に軋轢が生じ、職場での人間関係で苦しんでいました。そんな折、ひとつの祈りの文章が示されました。

もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。

（ローマ　8・13）

この一節で始まる文章には、人の心の中に生まれる怒りや憎しみについて、次のように続いています。

「人を恨んで、憎しみでがんじがらめになったことがあるだろうか。相手が目の前にいようといまいと、

四六時中、心は拘束され煩悶する。苦しいのは相手ではなく自分だ。（中略）解決は、妬みや憎しみを抑え込むことではない。押さえ込んでも厳然とそこに存在するので、ことある度に出てくる。まず御前に、憎しみを認めることだ。悔い改めて、神のもとへ持って行くなら、神がそれを引き受けて対処してくださる。」

それまで私は、教会に行って賛美歌を歌うような人は生まれつきの善人ばかりで、自分のような者には到底、無理な世界と思っているところがありました。ここでの出会いを通して、多くのキリスト者も、日々、肉の思いと戦いながら生きていることを思い知らされました。

また、時を同じくして、真摯に祈る理由が与えられました。私には十二歳年上の従姉がおり何年も肺の病気で苦しんでいましたが、当時、急激に容体が悪化して、脳への酸素供給が断たれ、呼びかけても反応がない状態になっていました。子供のころから大好きだった従姉の平安を誰かに願わずにいられず、自分の言葉で毎日、真剣に祈るようになりました。

二つの悩みの中でこの集いに導かれたおかげで、救いを受け入れることができました。バンクーバーからトロントに帰る飛行機の中、自分の人生がそれまでと完全に違う方向に進み始めたことをはっきり意識しました。聖書を読んで、祈り、礼拝に参加することが生活の中心となり、ぜひまた日本で直接、話を聞きたいと強く願うようになりました。

救いを受け入れた後の初めての帰国で御代田に行きました。十数年ぶりに訪れた福音センターは、温かみのある、とても懐かしい場所に思え、私たちを待っていてくださった主の憐れみに心から感謝しました。その後で、意識のない従姉にも会いにいきました。耳元に話しかけても、その声が聞こえているのかも分からない従姉を見るうち、聖書の中の一節が思い出されました。

イエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」（ヨハネ　9・1～3）

枕もとで、声に出して読んでみたとき、初めてみことばが働きかけてくるのを感じました。

御代田での交わりの中では、その場にいた方々が、名前しか知らない従姉のために祈ってくれました。そこでは、兄弟姉妹は、一人ひとりが主と向かい合っているだけでなく、お互いの信仰を守るために支えあっていることを実感しました。この後、自分も兄弟、姉妹という言葉を自然に使うようになっていきました。

福音センターで洗礼を受けた翌日、私は礼拝堂の後ろの席に座っていました。そのとき、日本を出る前から集会の場で、何度も主のすぐそばまで来ていたのに、ずっと救いを拒んできた。その盲目と愚かさのために、何年も時間を無駄に過ごしてしまった・・・こんな思いが湧き上がってきて、暗い後悔と痛惜の念で満たされたのです。

しかし、結婚の日に聞いたベック兄の言葉が思い出されました。たとえ世を去る直前であっても、神を受け入れればそれで十分なのだ、ということに思いが至り、主と正面から向かい合うのに遅すぎることはないはずだ、もう、後ろを向いて沈み込むことはやめよう、と考え直しました。自分にとって必要だったのは、初めて吉祥寺キリスト集会に足を踏み入れてからの十六年という時間と、日本とカナダの間の長い距離でした。主は、この長さと時を正確に測って与えてくださったと思います。

結婚式の前日に贈られて以来しまい込まれていた

聖書からも、たくさんのみことばが大きな意味を持って自分の中に入ってきました。なかでも、エゼキエル書は私にとって最も胸に迫る書物のひとつです。ここに出てくるユダヤの民は、神の祝福を一身に受けていながら、主に背いて、バビロンへと連れていかれます。エゼキエル書は、神の怒りに溢れていながらも、悔い改めて立ち返る者には必ず回復が与えられる、という希望の書でもあります。

彼らがそこに来るとき、すべての忌むべきもの、すべての忌みきらうべきものをそこから取り除こう。それは、彼らがわたしのおきてに従って歩み、わたしの定めを守り行なうためである。こうして、彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。

（エゼキエル　11・18、20）

イスラエルを遠く離れた地で、初めて神の愛と恵みを理解した捕囚の民の心が、遥かな異国でようやく主のあわれみに気付いた自分の姿と重なりました。

その所であなたがたは、自分の身を汚した自分たちの行ないと、すべてのわざとを思い起こし、自分たちの行なったすべての悪のために、自分自身をいとうようになろう。

（エゼキエル　20・43）

このみことばを読むたび、自分が犯してきた多くの罪、今も犯している罪が思い起こされます。カナダに移住した後、父が長い闘病の末、亡くなりました。私は仕事の忙しさを理由にして、ろくに見舞いにも帰らず、冷淡な態度をとりました。また、移住すると決めたとき、思いとどまるよう母親に懇願されましたが、それを振り切るように日本を出てきたことも、今になってトゲのように心に刺さっています。つい後ろを振り返り、罪の記憶がよみがえってくるときは、次のみことばが力を与えてくれます。

彼が犯したすべてのそむきの罪は覚えられることはなく、彼が行なった正しいことのために、彼は生きる。わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。――神である主の御告げ。――彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。

（エゼキエル　18・22～23）

わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよめられる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を授ける。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授け、わたしのおきてに従って歩ませ、わたしの定めを守り行なわせる。

（エゼキエル　36・25～27）

主は、自分だけを見ていた「石の心」を私から取り除き、主に信頼する「肉の心」を与えてくださいました。私を内側から作りかえ、主との交わりの中に生かしてくださっていることに感謝しています。

佐藤亮（さとう　りょう）
一九六三年、新潟県出身。筑波大学自然学類、修士卒。二〇〇〇年より、カナダに移住。現在、ＩＭＡＸ Ｃｏｒｐｏｒａｔｉｏｎ勤務。妻、多津子。オンタリオ州トロント在住。

主に信頼する者は、失望させられることがない

佐藤 多津子



右端が多津子さん、内田万里子さん、ベックさんと

どのようにして救いへと導かれたかについて

私が初めてキリスト集会に足を踏み入れたのは、母に連れられて軽井沢のキャンプに行ったときだったと思います。もうずいぶん前で、一九八〇年代のことになります。その後、母や両親のお供で御代田に行ったり、家庭集会にも何度か連れられて行きました。メッセージやみことばに触れる機会はたくさんあったのですが、聞く耳を持たず、背を向けていました。

一九九三年に佐藤亮と結婚し、未信者同士でしたが、私の両親、特に母のたっての希望で、ベックご兄姉のお宅で身内だけの小さな結婚式をあげていただきました。夫の両親は信仰を持っていませんでしたが、快く出席してくれたことがうれしかったです。そのときベック兄にお話を聞きましたが、内容についてはほとんど覚えておらず、ただ最後にベック兄が、「今の話は忘れていいよ」とおっしゃったのだけを覚えています。自我の強い私は、今の話をよく覚えておきなさいなどと言われたら、強制させられたような気持ちになり反発したかもしれません。

結婚後も夫婦二人、両親のお供で御代田に何度か行きましたが、積極的にかかわることはせず、センターの後ろの方の席でメッセージやみことばを聞いていました。心の耳は閉じたままで、福音に触れる機会は多くありましたが、それ以上の歩みはありませんでした。

ただ、不思議なことに、センターの後ろの方に座りながらお祈りやメッセージを聞くのは心地よくて、穏やかな時間を過ごしました。こうして、つかず離れずのあいまいな態度のまま、ときどきみことばに触れて、なるほどと思う、まったくなまぬるい者でした。

また岩地に蒔かれるとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。

（マタイ　13・20〜21）

私は、もともと物事を深く考えたり、努力したり、頑張ったりするのが苦手で、人生何とかなるだろうと思って、行き当たりばったりに生きてきました。学生時代、キリスト教概論は必修科目でしたが、聖書を真剣に読むこともなく、信仰を求める気持ちはほとんどありませんでした。兄弟姉妹の方々が学生時代のうちに人生や生きる意味を追求して、教会の門戸をたたかれたという話をお聞きすると、私とはまったく違う世界のように感じていました。ただ、創造主なる絶対的な存在はあるだろうと感じていて、そこに真実があるのだろうかと、ぼんやりとですが思っていました。真実ならそれを知りたいと考えていました。

話は前後しますが、母がキリスト集会へ導かれたのは、父の一番上の姉（私にとっての伯母）を通してだったそうです。集会に集っていた伯母の家に飾ってあった次のみことばに触れて、信仰に導かれたと話してくれました。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。

（1テサロニケ　5・16〜18）

母からこのことを聞いたとき、後半の「祈りなさい。感謝しなさい」はわかるけれど、「いつも喜んでいなさい」というのは難しいのではないかと思いました。うれしいときは喜んでいられるけれど、「いつも」というのはちょっと無理ではないかと感じました。しかし、母は集会に導かれ救われて、とても喜んでいました。そして私にも、早く信仰を持つように、といつも言っていましたが、そう言われれば言われるほど強情な私は拒否していました。父は長い間救いを拒んでいましたが、後に導かれて、一九九二年御代田の福音センターが建設された年にセンターで受洗しました。信仰を持つようになって父はずいぶん変えられ、聖書を読むようになり、明るくなりました。

カナダでの生活

私たち夫婦は二人とも海外志向があり、一年の準備期間を経て二〇〇〇年末カナダへ移住しました。日本での仕事も辞め、住まい、持ち物を全部処分してトロントで新生活を始めました。私もトロントで働くつもりでいましたが、何の特技もなく、英語も達者でない私には仕事が見つかりませんでした。この仕事探しを通して、初めて挫折を味わいました。それまでは、何とかなるだろうと楽観的に生きてきて、何とかなっていたつもりでしたが、このときだけはどうにもならず、主は私の高慢な思いをすべて打ち砕かれました。

ボランティアをしたり、バイトをしたりしながら、満たされない思いで過ごしていたとき、二〇〇九年のバンクーバー喜びの集いに、当時カルガリーにいた兄夫婦も来ると聞き、旅行気分で参加しました。夫は気が進まず、直前まで行きたくないと言っていたのですが、キャンプで多くの兄弟姉妹とお交わりできて、びっくりすることに帰る頃にはあっという間に救いへと導かれていました。私自身は、いつか何かきっかけがあれば私も信仰に導かれるだろうかと、漠然と考えていましたが、こんなに早く夫が先に救われるとは思ってもみませんでした。

しかし、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。

（マルコ　10・31）

夫が信仰を持ってくれたことはうれしいことであり、夫婦いっしょに救われるのならと、私も喜んで救いを受け入れました。そして翌年の二〇一〇年九月に御代田で、二人いっしょに洗礼の恵みをいただきました。

洗礼を受けた翌年の二〇一一年に、母は天に召されました。検査入院中に容体が急変したそうです。そのときちょうど私は、日本に一時帰国するためにトロントの空港にいて、ずっと母に付き添っていてくれた義姉からその知らせを受けました。いつか母が天国に旅立つ日が来ても、きっと私が来るのを待っていてくれるだろうと、なんとなく思っていたのですが、間に合いませんでした。母は、私たち夫婦が受洗したことをとても喜んでおり、天国でまた会えるからと安心して、待たずにいってしまったのかもしれません。その翌年の二〇一二年には、一人になって寂しがっていた父が、母の昇天から一年を待たずに召されました。

信仰があるからこそ、天国で両親に再会できることを確信できるように、主がなさってくださいました。初めてキリスト集会に足を踏み入れて福音に触れてから、救いにあずかるまでにずいぶん回り道をしました。カナダへの移住も自分たちの力で成し遂げたと思っていましたが、今は、主が許されたからできたことであり、このことを通してイエス様と会わせてくださったのだと分かります。

わが道を行くとして主を拒んできた私でさえも、主は見捨てることなく、辛抱強く救いへと導いてくださいました。これまでのことを考えると、主はたくさんのご栄光を見せてくださいました。そして、私たちに与えられるさまざまな試練は、イエス様にさらに近づくためのものであることを知りました。信仰を持っていなかったとき、どのようにして試練を乗り越えていたのだろうかと、今あらためて思います。もしかしたら無意識のうちに主に祈っていたのかもしれませんが、よくわかりません。

御国をめざして

今はどんなときにも祈りながら前に進めるので感謝です。これからも主に信頼して、主に喜んでいただくには何をしたらよいかを教えてください、と祈りながら、夫婦二人でイエス様だけを見上げて、歩んで行きたいと思います。目指すは天の御国だけですから、心配することは何もありません。天国とはどんなところかわかりませんが、きっと言葉にできないほど素晴らしいところだろうと想像しています。

狼は子羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜が共にいて、小さい子どもがこれを追っていく。（イザヤ　11・6）

天国で両親と先に召された長兄に再会できるのが、今から楽しみです。まだまだ未熟な信仰で歩みの遅いものですが、真剣に祈れば主は聞いてくださること、主は最善の道を備えてくださることを確信できますから感謝です。

恐れないで、ただ信じていなさい。（マルコ　5・36）

彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。（1ペテロ　2・6）

心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。（マタイ　22・37）

最近の世界情勢を見ていると、本当におかしくなってきていると思わされます。過激な思想の組織が台頭したり、様々な国で内戦が起きたり、黙示録の預言が現実味を帯びて迫ってきます。

まだ救われていない大切な家族や友人、まわりの方々に、再臨が来る前にイエス様に出会ってほしいと心から願っています。そのために、イエス様が何もできない私のような者でも用いてくださり、少しでも多くの人々に福音を伝えてくださいと祈る毎日です。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

佐藤多津子（さとうたつこ）
一九五六年　東京都出身、国際基督教大学卒
夫・亮

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

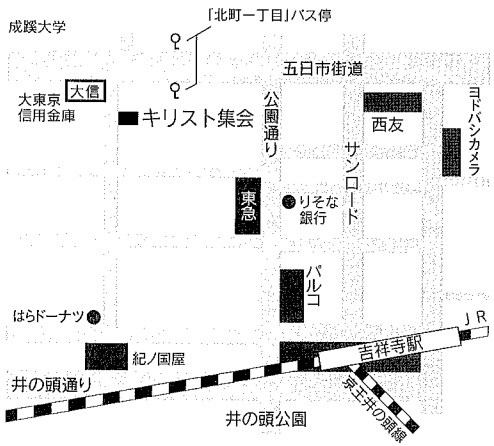
家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会

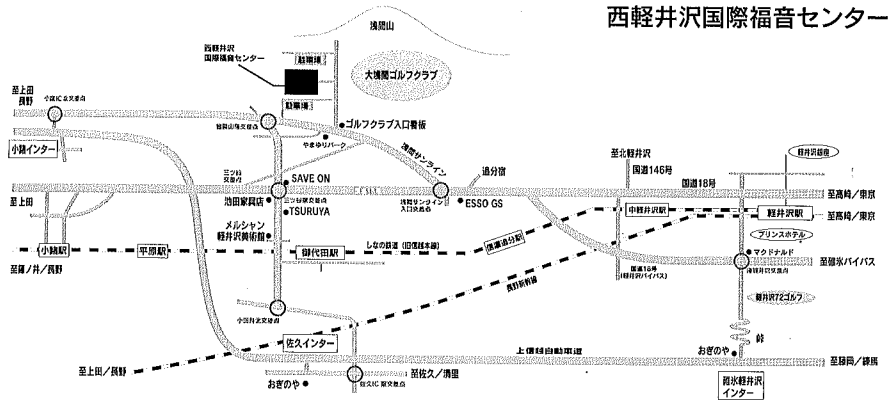
東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）



日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00

西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15 〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33 〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

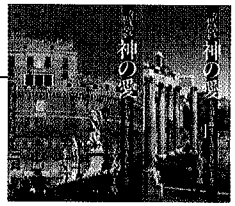


ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

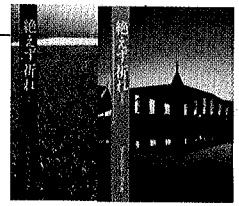
なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ (上・下巻)



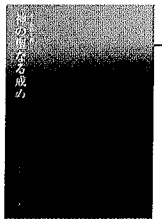
ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180−0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4−9−11　吉祥寺キリスト集会

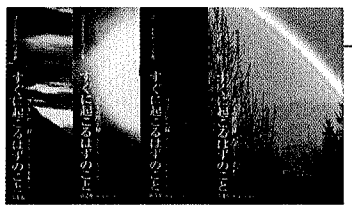
集会の出版物



モーセの十戒　神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。



すぐに起こるはずのこと—ヨハネの黙示録 (第1〜4巻)

ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1〜3章、第2巻には4〜7章、第3巻には8〜15章、第4巻には16〜終章までが、それぞれ収められています。



光よあれ —私たちは主のもの

証しシリーズ (第1〜9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

※主のご再臨が近づくいま、すべての本を送料のみで配付しています。
※主は生きておられるの最新号につきましては1部100円です。
　お気軽にお申し込みください。



Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第37号

定価100円（税込み）2015年7月15日初版

編集長	ゴットホルド・ベック
編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。

